

IV 久玉遺跡 (第4次調査)

I. 調査に至る経緯

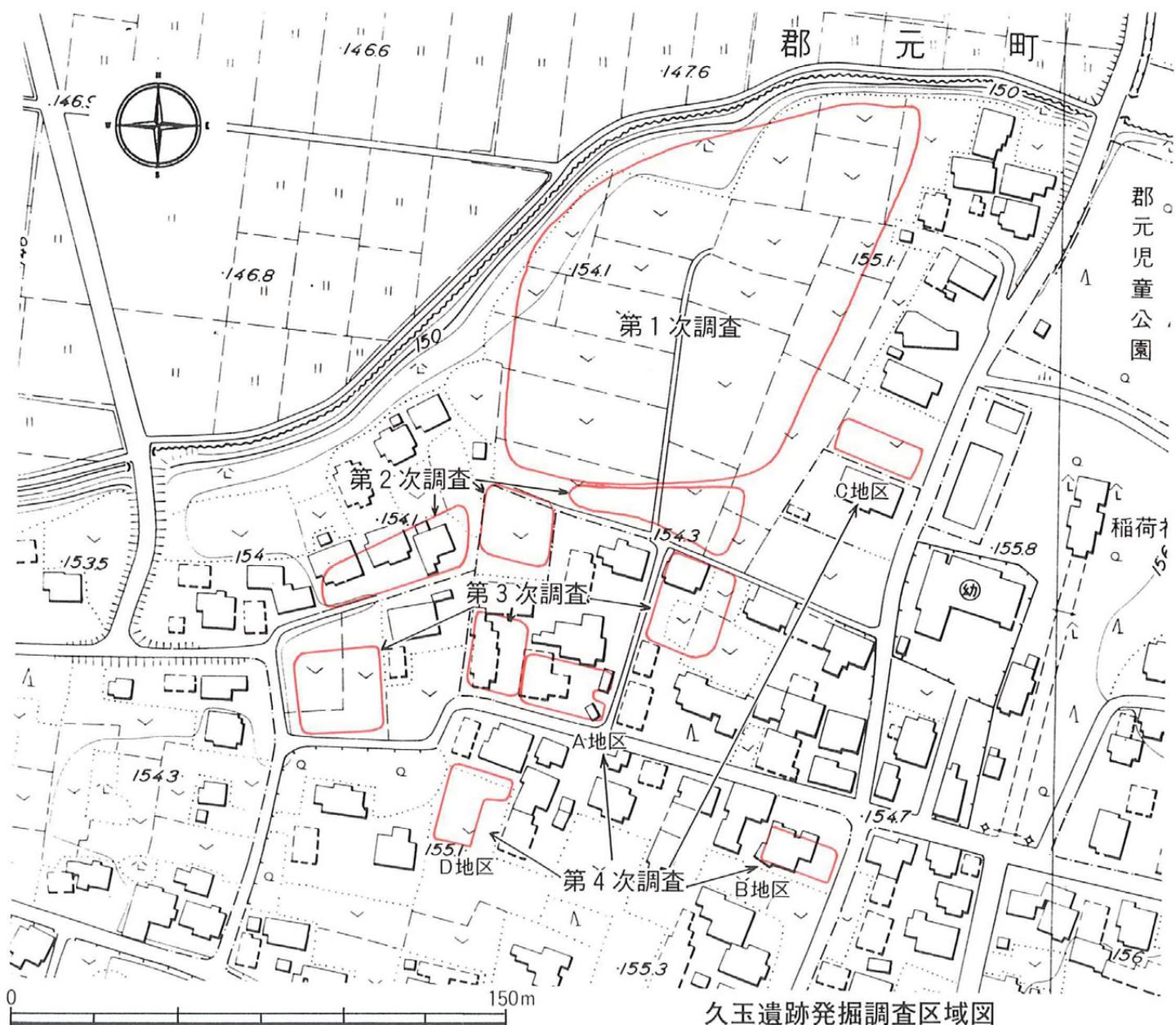
郡元・祝吉地区区画整理事業は昭和50年から実施され、すでに73.7%の土地が区画整理されている。それに伴う発掘調査は昭和55年をかわきりに平成3年度で第7次の調査を迎えるわけである。平成3年度、都城市都市整備課の実施する同地区の区画整理事業面積は約3.8%である。同年4月、同課と協議を行った結果、現況が畑地もしくは荒地である面積約2,000㎡を同年6月18日から7月31日までと同年12月から平成4年1月までの期間で発掘調査を実施した。

II. 遺跡の概要

久玉遺跡は都城市郡元町字久玉に所在する。

遺跡は都城市街地を形成する台地の北縁部、大淀川の支流である沖水川により浸蝕された河岸段丘を呈し、北側低地水田との比高差が約10m程の標高約150m程に立地している。郡元・祝吉町内の遺跡は西から祝吉遺跡、松原遺跡そして久玉遺跡と連続してつながっており、地形状もお互い関連性の強い遺跡であることがうかがえ、発掘調査の結果において中世から近世の大規模な集落跡であることがわかってきている。

当遺跡の基本土層層序は、第Ⅰ層耕作土・第Ⅱ層白ボラ(文明期に桜島より噴出した軽石)・



第Ⅲ層黒褐色砂質土・第Ⅳ層御池ボラ・第Ⅴ層漆黒粘質土・第Ⅵ層アカホヤ・第Ⅶ層明黒褐色シルト…と続く。遺物包含層は第Ⅲ層黒褐色砂質土で、遺構検出面は第Ⅳ層御池ボラ上面である。

Ⅲ. 調査の内容

調査方法は、公共座標のN・S線に一致したメッシュにグリッドを区割し、単位グリッドは10×10mとした。このメッシュは久玉第1次調査と同一のものをを用い、南北方向は北からアルファベットを東西方向は東から算用数字を用いて表記した。また、調査区域を久玉Ⅳ-A地区(略記号KUIV-A)、B地区(KUIV-B)、C地区(KUIV-C)とD地区(KUIV-D)に分けた。

①久玉Ⅳ-A地区

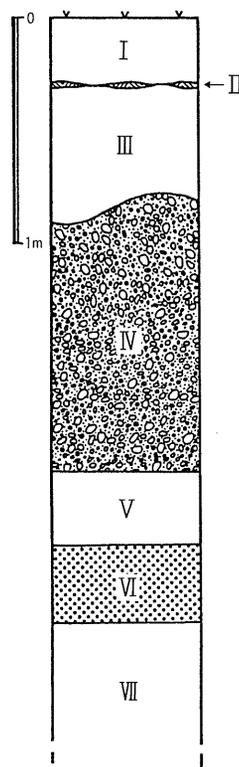
A地区は、久玉Ⅲ-A地区東側隣接地約750㎡である。当地は区画整理事業の宅地換地後の荒地のため、表土がかなりの部分破壊を受けており、場所によっては遺構検出面の御池ボラ層まで攪乱した状態であった。遺構は溝状遺構7条、井戸跡2基、竪穴状遺構2基、柱穴内に礎石を置いた大型の堀立柱建物跡(2間×5間・調査範囲では)1軒、大型の土坑2基が出土している。出土遺物は舶載磁器、国内産の東播系須恵質土器、肥前系及び薩摩系の陶磁器等である。

②久玉Ⅳ-B地区

B地区は面積約350㎡で、A地区同様表土は宅地換地後の荒地のため、かなり攪乱し、部分的に検出面まで及んでいた。表層(耕作土)下の第3層黒褐色土層は部分的にしか残存していない。遺構は溝状遺構6条、井戸跡1基を検出し、遺物の出土は少なく、肥前系及び薩摩系の陶磁器が主である。

③久玉Ⅳ-C地区

C地区は久玉遺跡第1次調査の東側隣接地約350㎡である。遺構は溝状遺構2条、堀立柱建物跡(2間×3間)1軒の他、現市道西側添に試掘を行った結果、硬化面をもつ溝を確認した。C地区では

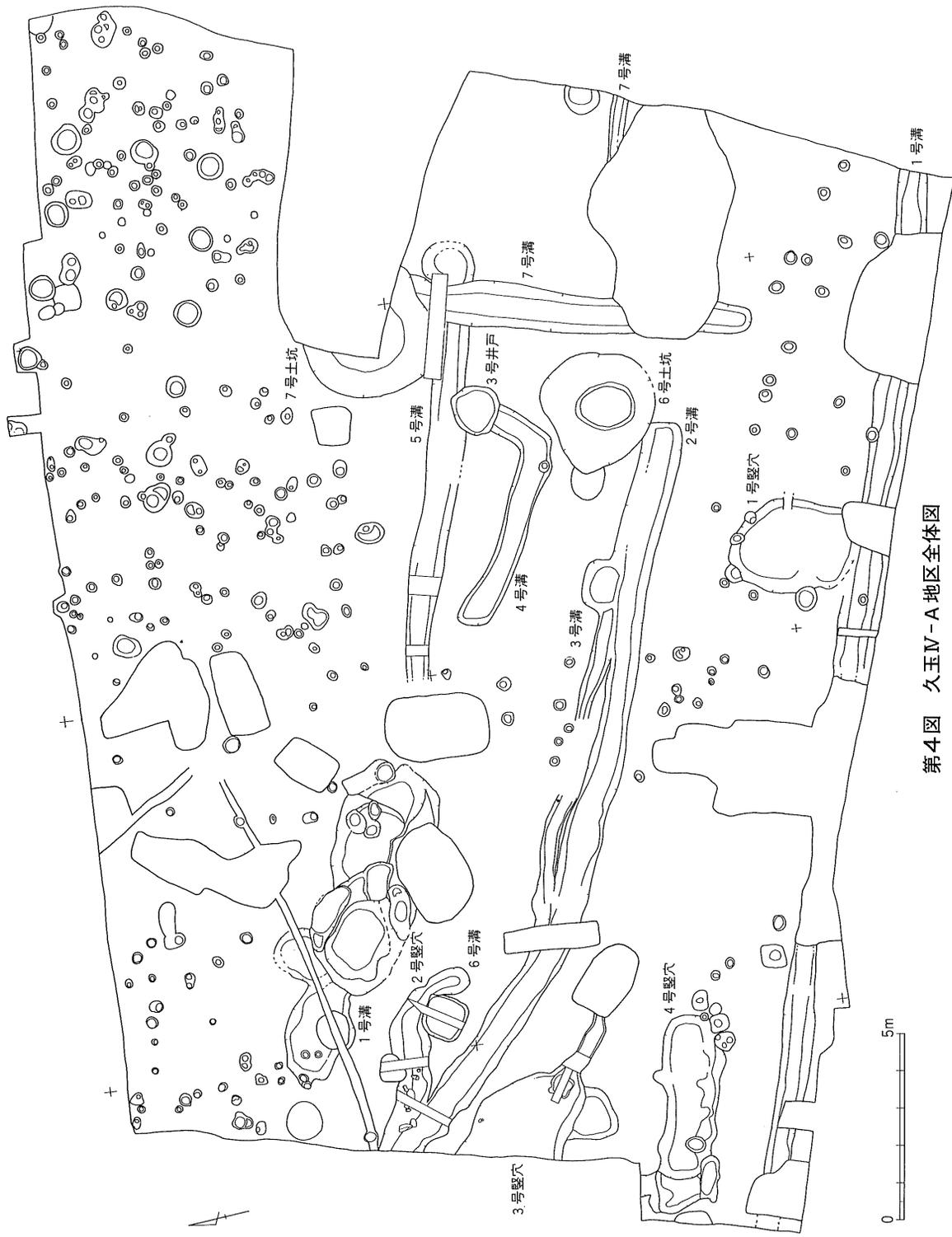


第2図 基本土層柱状図

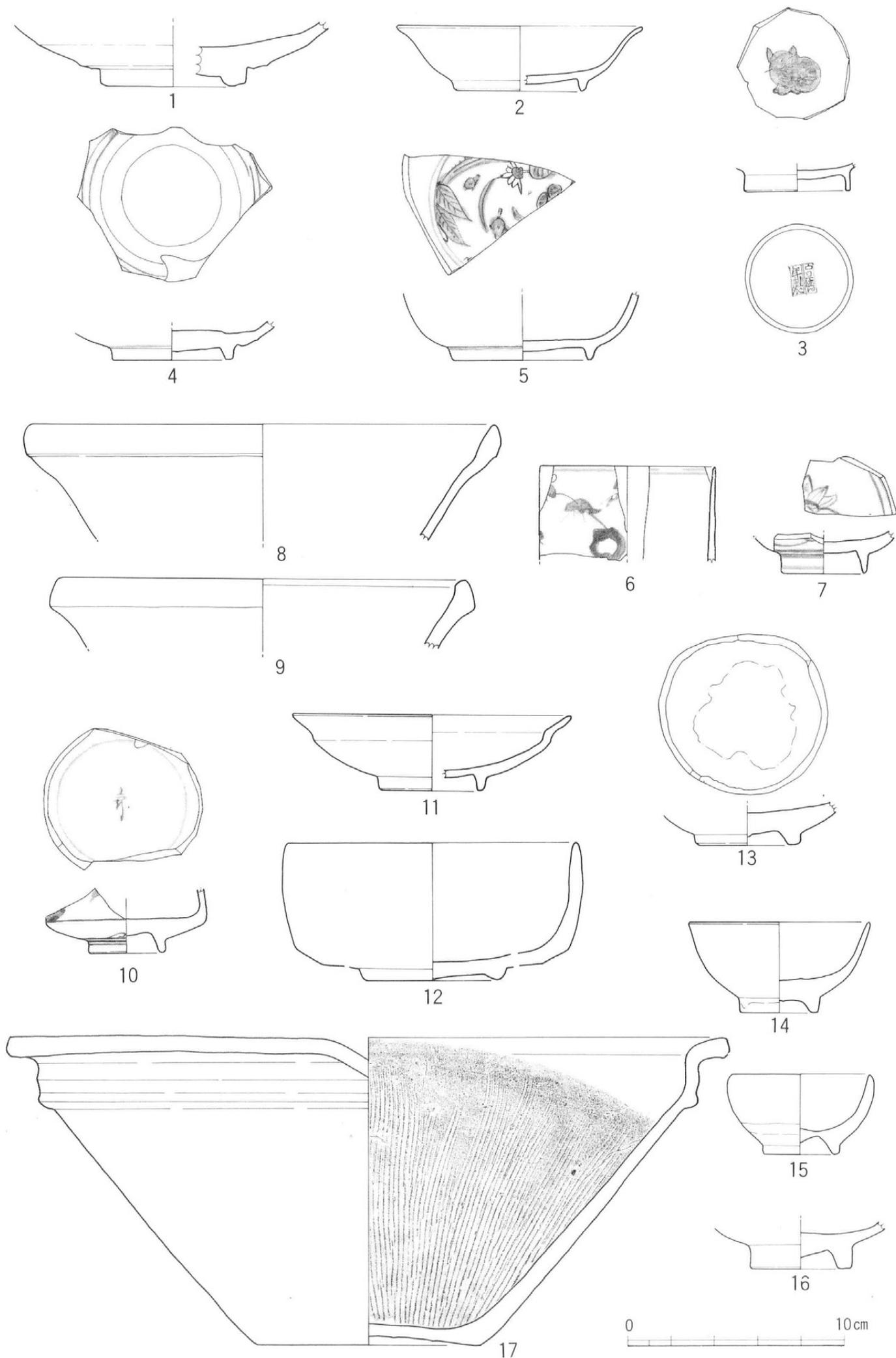


第3図 久玉MA・B・D地区遺構配置図

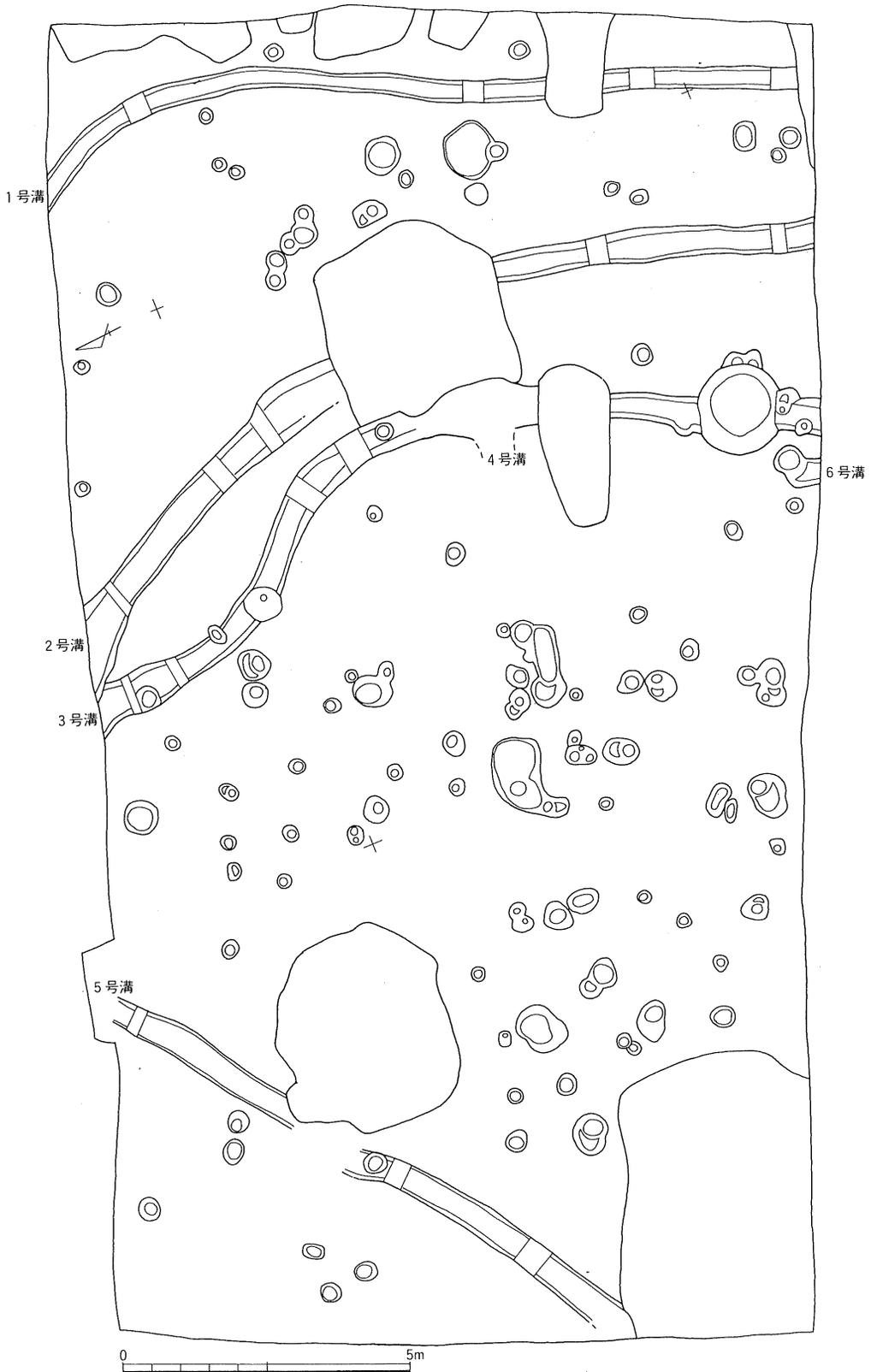
+



第4图 久玉IV-A地区全体图



第5図 久玉M-A地区出土遺物実測図

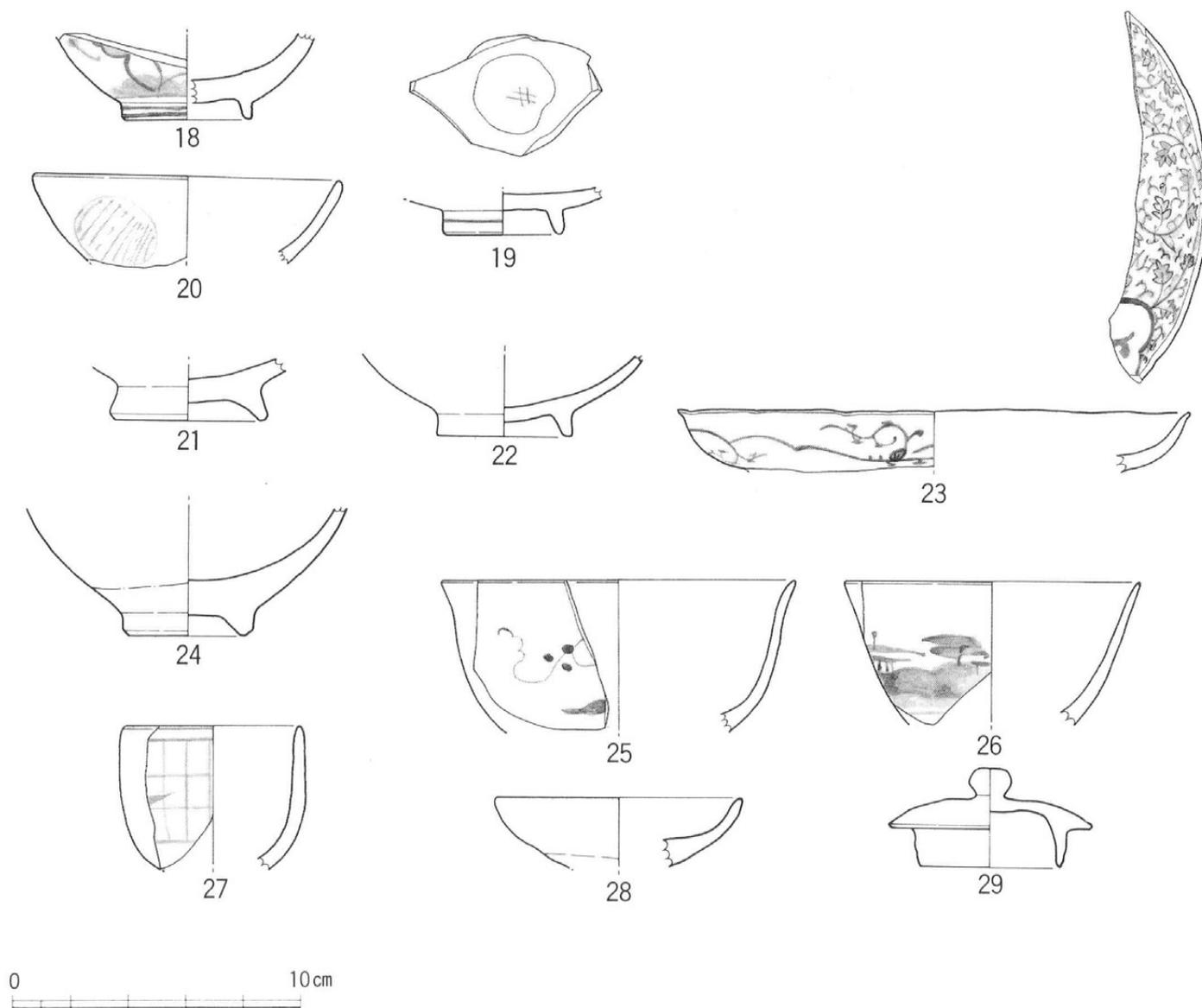


第6图 久玉VI-B地区全体图

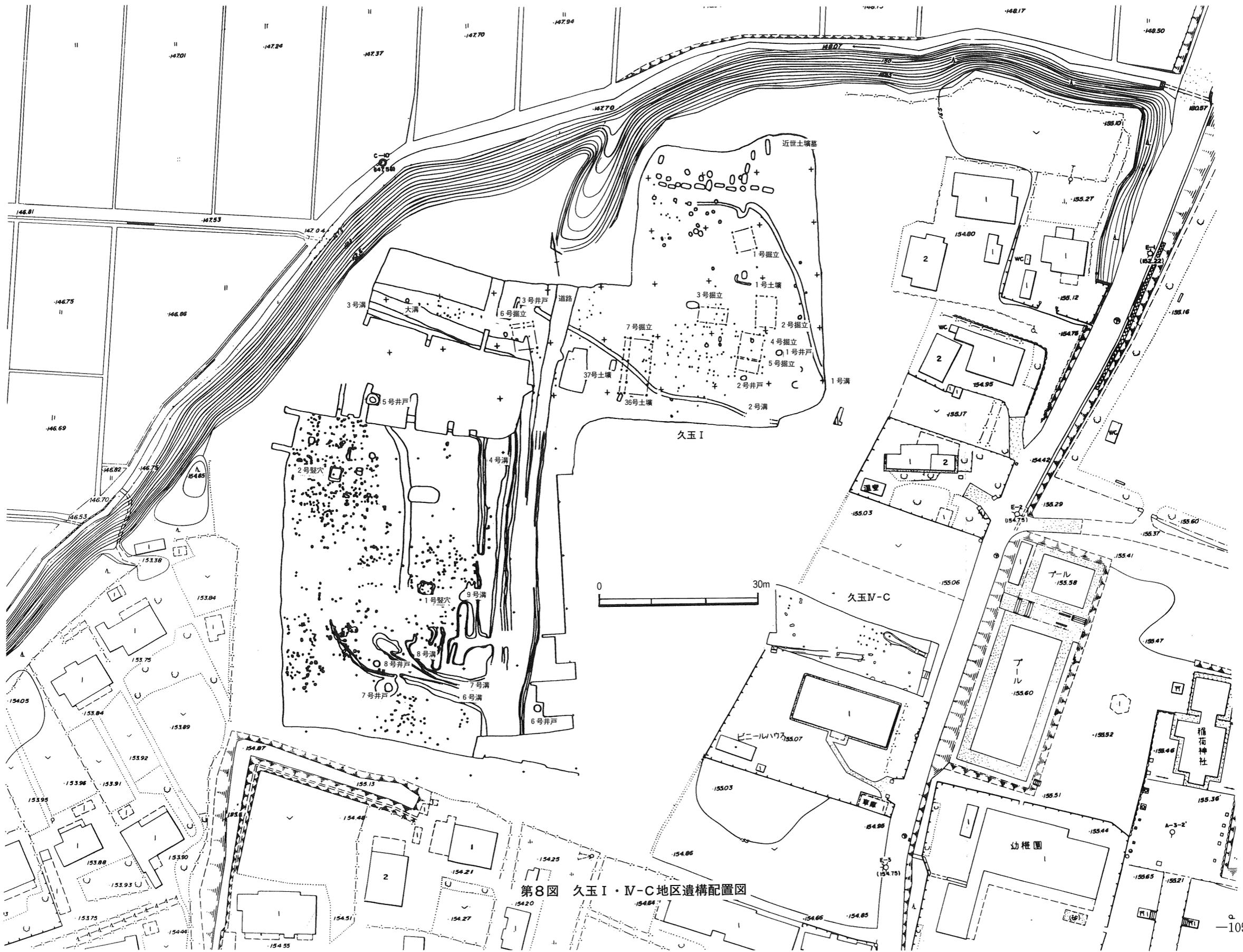
遺物の出土はなかった。

④久玉Ⅳ-D地区

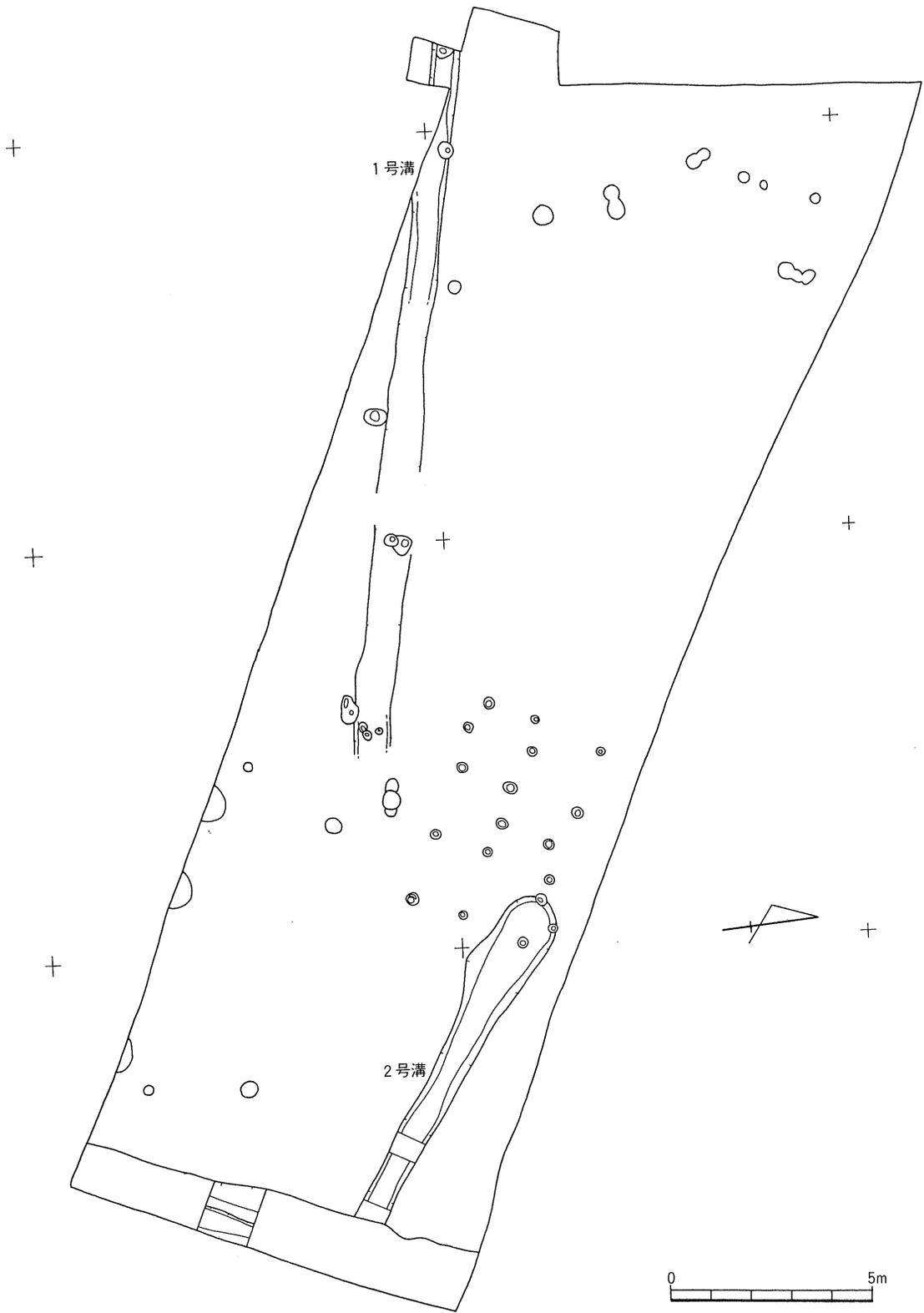
D地区は久玉遺跡第3次調査B地区の南側及び第3次調査C地区調査南東側で、道路予定区域約550㎡である。現況が畑地のため第3層黒褐色土層が良好に遺存していた。遺構は溝状遺構8条、大型の掘立柱建物跡(2間×4間が1軒、2間×3間が1軒、調査範囲では)井戸跡1基、土坑2基、ピット等の他、方形の周溝状遺構2基を確認した。肥前系及び薩摩系の陶磁器が中心だが、2号周溝状遺構からは凝灰岩製と軽石製の石塔、7号溝からは軽石製の板碑、また、2号土坑からは土師質土器の坏が2点出土している。



第7図 久玉Ⅳ-B地区出土遺物実測図



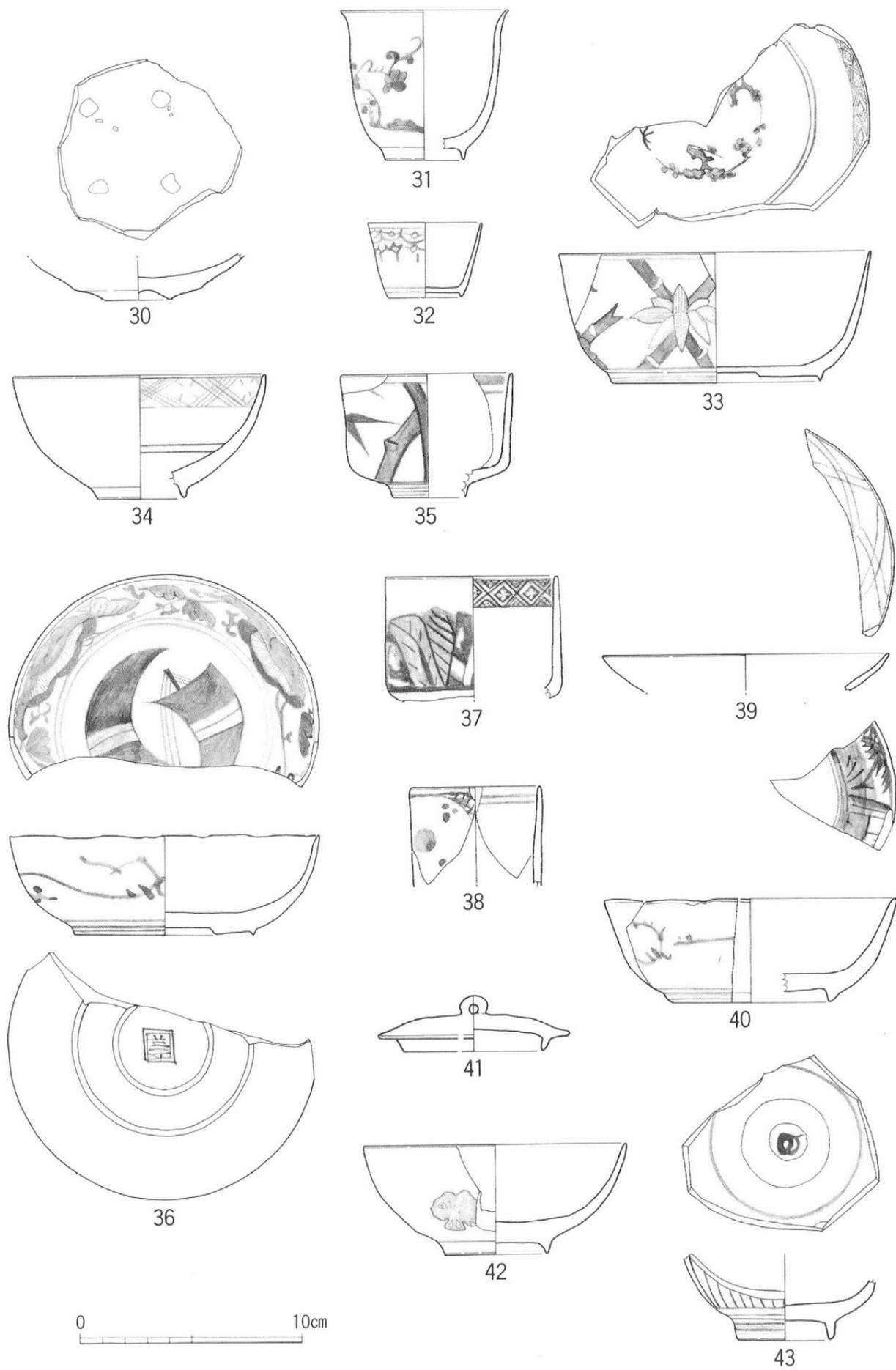
第8図 久玉 I・IV-C地区遺構配置図



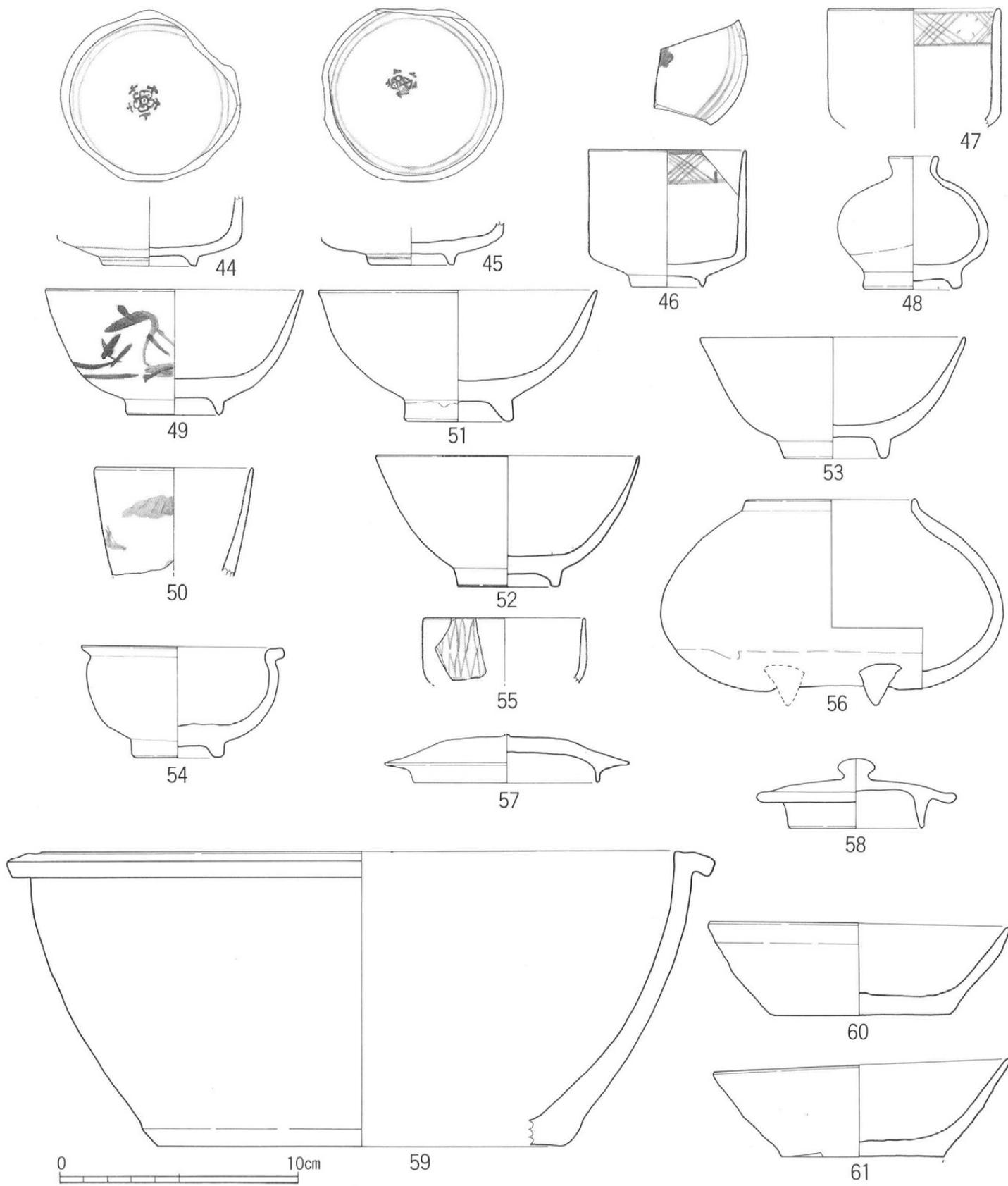
第9図 久玉N-C地区全体図



第10图 久玉IV-D地区全体图



第11图 久玉N-D地区出土遺物実測図(1)



第12図 久玉M-D地区出土遺物実測図(2)

遺物番号	種別	器種	グリッド(遺構)	法量(cm)			特徴	備考
				口径	底径	器高		
1	白磁	碗	R-16 (Pit16)	-	6.8	-	高台内無釉	13~14C
2	白磁	皿	R-15 (Pit10)	11.4	6.0	3.0	口縁端反り うるしつぎ	景德鎮 15C末~16C中
3	青花	碗	S-16 I-16境界	-	4.9	-		景德鎮 1600~1630
4	青花	皿	表採	-	5.5	-	高台内無釉 見込み-蛇ノ目釉ハギ	福建または広東 16C後-17C初
5	青花	皿	R-18 2号と6号溝中	-	6.4	-	㊦花鳥文	景德鎮 1600年初期~30年
6	染付	碗	R-17	8.2	-	-	㊦雪持笹文	1780~1810

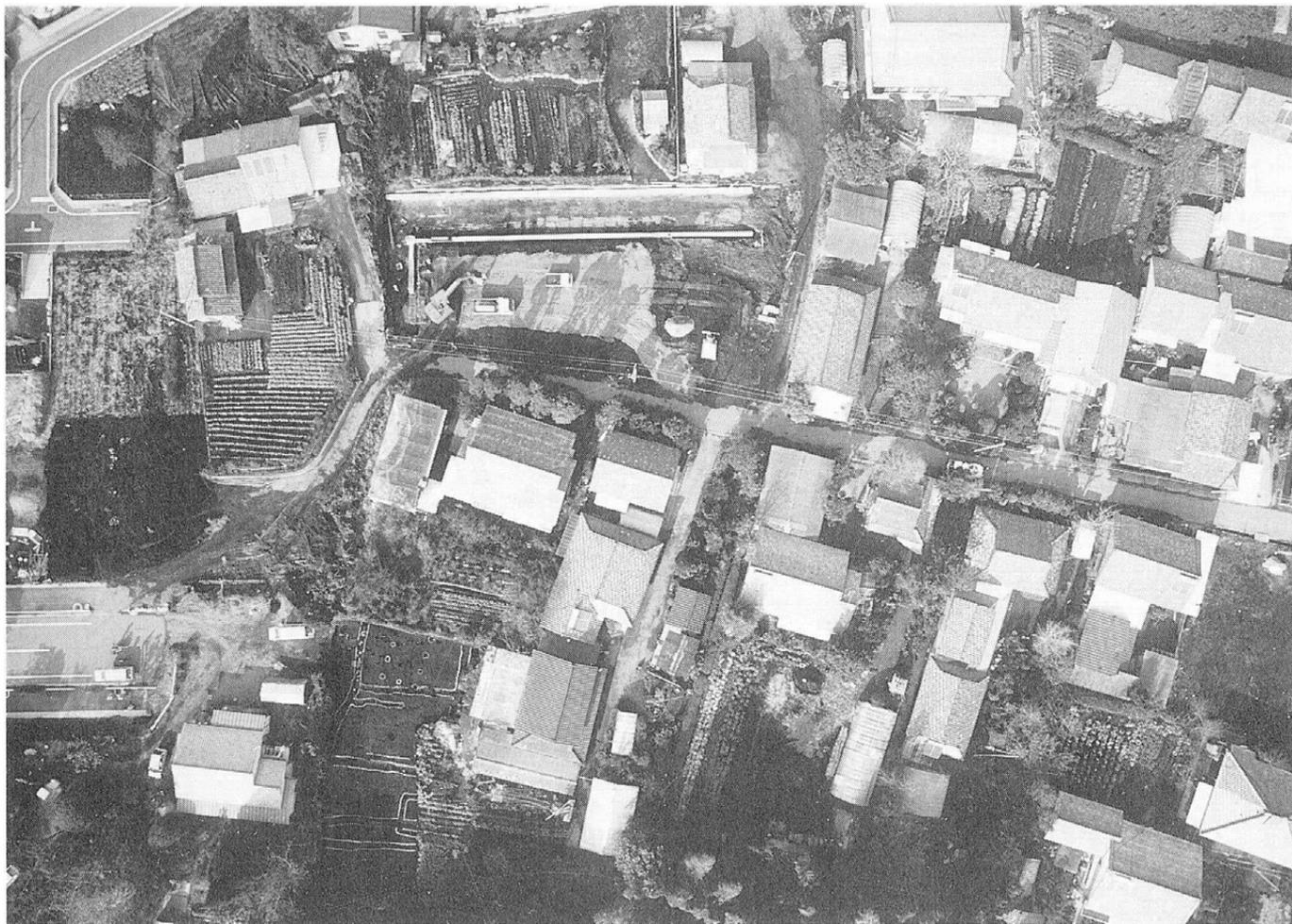
遺物番号	種別	器種	グリッド(遺構)	法量(cm)			特徴	備考
				口径	底径	器高		
7	青花	碗	R-15	—	3.8	—	腰のはるタイプ	15C末-16C中
8	東播系	こね鉢	T-15 (Pit29)	21.4	—	—		13C
9	東播系	こね鉢	S-16 I-16境界 (1号竪穴)	18.8	—	—		13C
10	染付	碗	T-16	—	3.5	—	見込み-寿文 ㊦折松文	
11	青磁	皿	表採	13.0	4.8	3.5	見込み-高台内無釉	肥前 17C中
12	陶器	碗	T-16 (1号竪穴)	13.4	6.2	6.4	底下銅釉 抹茶碗	17C後-近世
13	唐津	碗	T-17	—	5.0	—	灰釉、高台内無釉 見込み-砂目積	1600~1630年
14	薩摩	碗	S-16	8.4	3.7	4.2	見込み-蛇ノ目釉ハギ 高台内無釉	
15	薩摩	小杯	T-16 (竪穴1)	6.4	3.5	3.7	化粧土の上に透明釉	
16	肥前	碗	R-17 (2号竪穴)	—	4.6	—		
17	備前	播鉢	S-17 (2号溝)	33	10.4	14.2		17~18C
18	染付	碗	表採	—	4.4	—	見込み-蛇ノ目釉ハギ	18C中~末
19	染付	碗	V-9 (1号井戸)	—	4.0	—		1820-幕末
20	染付	碗	V-9 (1号井戸)	10.6	—	—	㊦丸文	波佐見窯 18C後~19C初
21	薩摩	碗	V-9 (土壇2)	—	5.3	—	白薩摩	17~18C代
22	薩摩	碗	V-9 (2号溝)	—	4.7	—	白薩摩	18C~幕末
23	染付	皿	V-9 (1号井戸)	18.0	—	—	輪花 ㊦ ㊧ 唐草文	肥前 1690-1740
24	陶器	碗	V-9 (1号井戸)	—	4.6	—	化粧土の上に透明釉 見込み-蛇ノ目釉ハギ	
25	染付	碗	V-9 (1号井戸)	12.2	—	—	口縁端反り ㊦ 蛇ノ目釉ハギ	波佐見窯
26	染付	碗	V-9 (1号井戸)	10.4	—	—	㊦ 山水文	19C初~幕末
27	染付	碗	V-9 (1号井戸)	6.0	—	—		
28	陶器	小皿	W-10	8.8	—	—	化粧土の上に透明釉	
29	薩摩	蓋	V-9 (1号井戸)	5.0	(庇径) 7.2	3.5		
30	唐津	皿	X-21 (5号溝)	—	3.0	—	灰釉 見込み-胎土目積	1590~1610
31	肥前	小杯	X-21 (5号溝)	7.8	3.6	6.8	㊦ 梅樹文	17C後半
32	染付	小杯	V-20 (5号溝)	5.2	3.4	3.4		18C後-19C初
33	染付	深皿	X-21(5号溝) W-20(5号溝)	14.2	9.6	5.9	蛇ノ目凹型高台 ㊦ 竹文 ㊦ 見込み-松竹梅で環状の文様	肥前 18C中~末
34	青磁染付	碗	W-20 (5号溝)	11.4	4.0	5.6	㊦ 四方ダスキ文	18C後半
35	染付	碗	W-20	7.8	3.4	5.6	筒型碗	
36	染付	深皿	W-21 (1号竪穴)	14.0	8.2	4.5	輪花高台内「筒江」の印 ㊦ 唐草ノ目凹型高台 ㊦ ぼたん見込み-帆かけ船	18C後半
37	染付	碗	W-20(5号溝) X-21(5号溝)	7.8	—	—	筒型碗 ㊦ 芭蕉文	18C後半
38	染付	碗	W-20	6.0	—	—	筒型碗 ㊦ 雪の輪文	
39	染付	皿	W-20 (5号溝)	13.2	—	—	見込み-蛇ノ目釉ハギ 高台内無釉	波佐見窯 18C後半
40	染付	深皿	X-21 (5号溝)	13.2	7.2	4.7	輪花 ㊦ 竹文 ㊦ 五弁花	波佐見窯 18C後半
41	薩摩	蓋	U-19 (1号井戸)	6.4	(庇径) 8.8	2.5	白化粧の上に透明釉 飛びガンナ技法	
42	肥前	碗	W-20 (5号溝)	11.9	4.6	5.0	見込み-蛇ノ目釉ハギ ㊦ コンニャク印判	18C中~末
43	染付	碗	U-19 (1号井戸)	—	4.2	—	白化粧土 見込み-蛇ノ目釉ハギ	

遺物番号	種別	器種	グリッド(遺構)	法 量 (cm)			特 徴	備 考
				口径	底径	器高		
44	染付	碗	V-20 (5号溝)	—	4.0	—	筒型碗 見込印花	
45	染付	碗	V-20 (5号溝)	—	3.7	—	筒型碗 見込印花	
46	染付	碗	W-20 (5号溝)	6.8	2.5	5.9	筒型碗 見込み-五弁花コンニャク印判	
47	染付	碗	表採	7.4	—	—	筒型碗 ㊦ 四方ダスキ文	
48	陶器	壺	U-19	2.3	4.7	5.7	化粧土の上に透明釉 油壺	
49	染付	碗	W-20 (Pit 1)	11.0	4.1	5.4	見込み-蛇ノ目釉ハギ	
50	染付	杯	W-20	6.6	—	—	ソバチョコ	18C代
51	陶器	碗	W-20 (5号溝)	11.8	4.5	5.6	白化粧の上に銅緑釉 見込み-蛇ノ目釉ハギ	
52	薩摩	碗	V-20 (5号溝)	11.4	4.4	5.65	見込み-蛇ノ目釉ハギ	
53	薩摩	碗	V-20 (5号溝)	11.4	4.5	5.2	白化粧のあと透明釉 見込み-蛇ノ目化粧土 高台内-無釉	18C後-幕末
54	陶器	小鉢	W-21 (1号竪穴)	8.6	4	4.7	見込み-蛇ノ目釉ハギ 高台内-無釉	
55	染付	碗	W-21 (1号竪穴)	7.0	—	—	㊦ 網目文 赤絵の蓋物の身	17C末~18C中
56	薩摩	茶家	W-20 (5号溝)	7.4	—	8.8		
57	薩摩	蓋	V-20 (5号溝)	8.0	(庇径) 10.5	—	白化粧の上に透明釉	
58	薩摩	蓋	W-21 (5号溝)	5.9	(庇径) 8.6	3.0		
59	薩摩	鉢	W-21 (1号竪穴)	30	17.2	12.5		
60	土師器	坏	U-19 (1号土坑)	12.8	7.7~ 7.5	4.0~ 3.75	底部-糸切り 色調-明橙褐色	
61	土師器	坏	U-19 (1号土坑)	12.7	6.9	4.2~ 3.6	底部-糸切り 色調-明橙褐色	

IV. 小結

今回の久玉遺跡第4次調査は4地点で面積約2,000㎡を発掘した。A地区では、近世の掘立柱建物跡(柱穴の規模がかなり大きく礎石を伴う)、逆フラスコ型の大型土坑一対が出土した。D地区でも同様に、大型の掘立柱建物跡を確認し、A地区のそれと棟方向がほぼ直交する。この他、中世の方形周溝墓2基を検出した。V・IV-18. 19区の2号の周溝内から相輪的空風輪4、火輪1、水輪2点、7号溝より軽石製の板碑が出土した。全体の遺構の時期区分は埋土が黒褐色土系のものが2時期に分けられ、表層の灰黒色土と大きく3時期に大別できるようである。

圖 版



久玉第4次調査区全景



久玉Ⅳ-A (KUⅣ-A) 地区全景



久玉Ⅳ-A 大型掘立柱建物跡



久玉Ⅳ-B (KUIV-B) 地区全景



久玉Ⅳ-C (KUIV-C) 地区全景

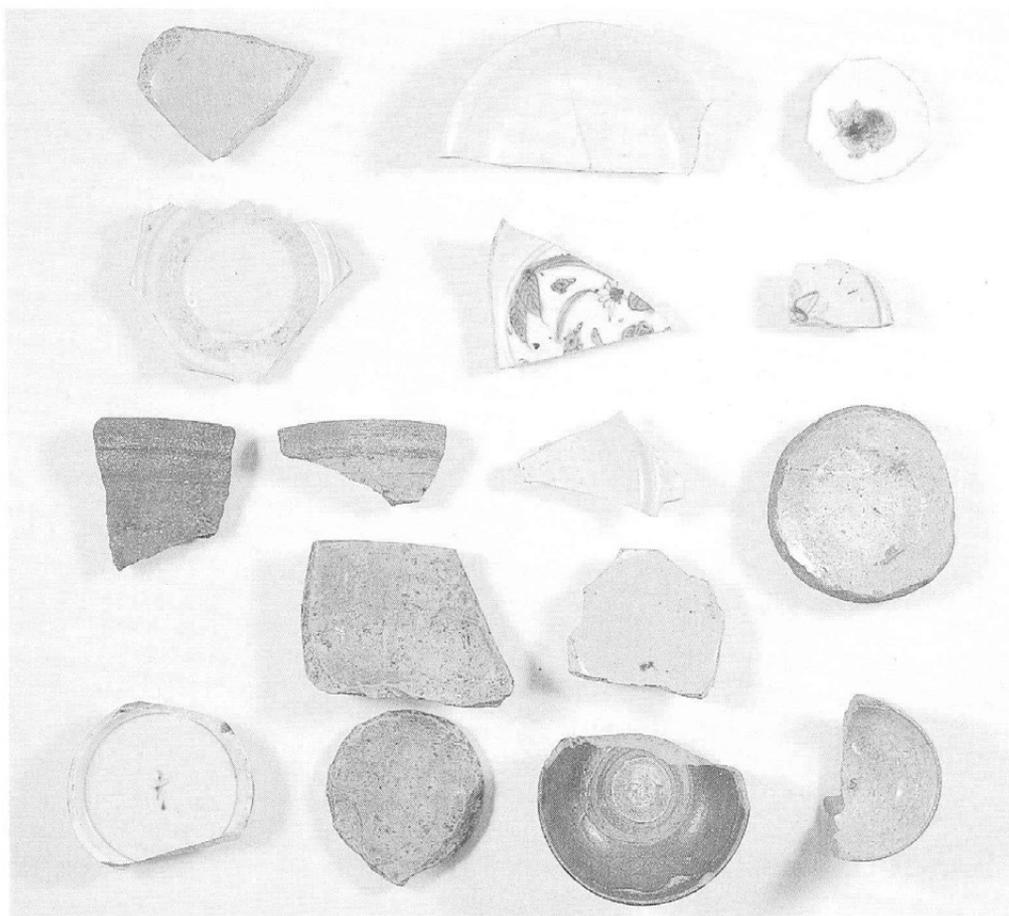


久玉Ⅳ-D地区全景

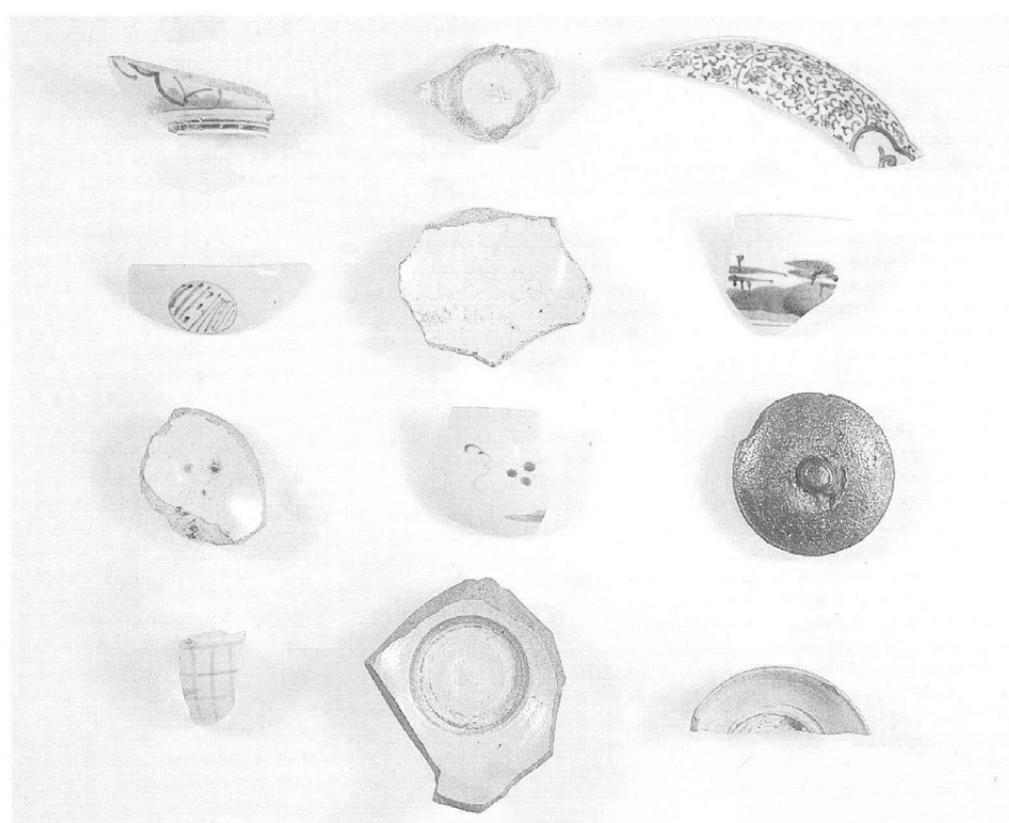


久玉Ⅳ-D (N) 地区全景

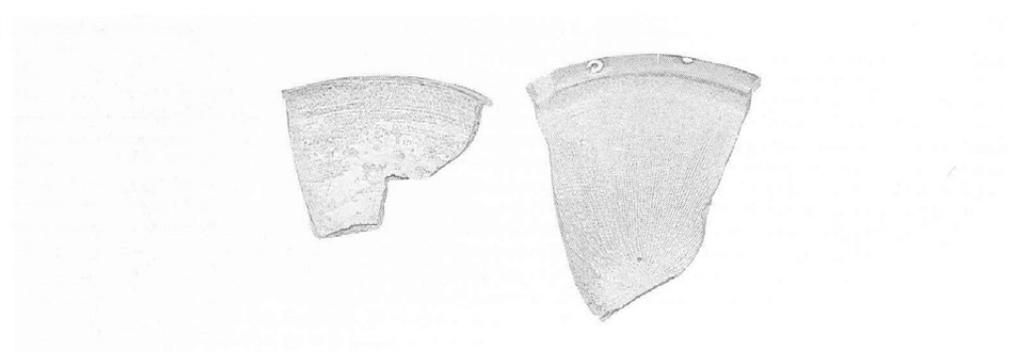
久玉IV-A

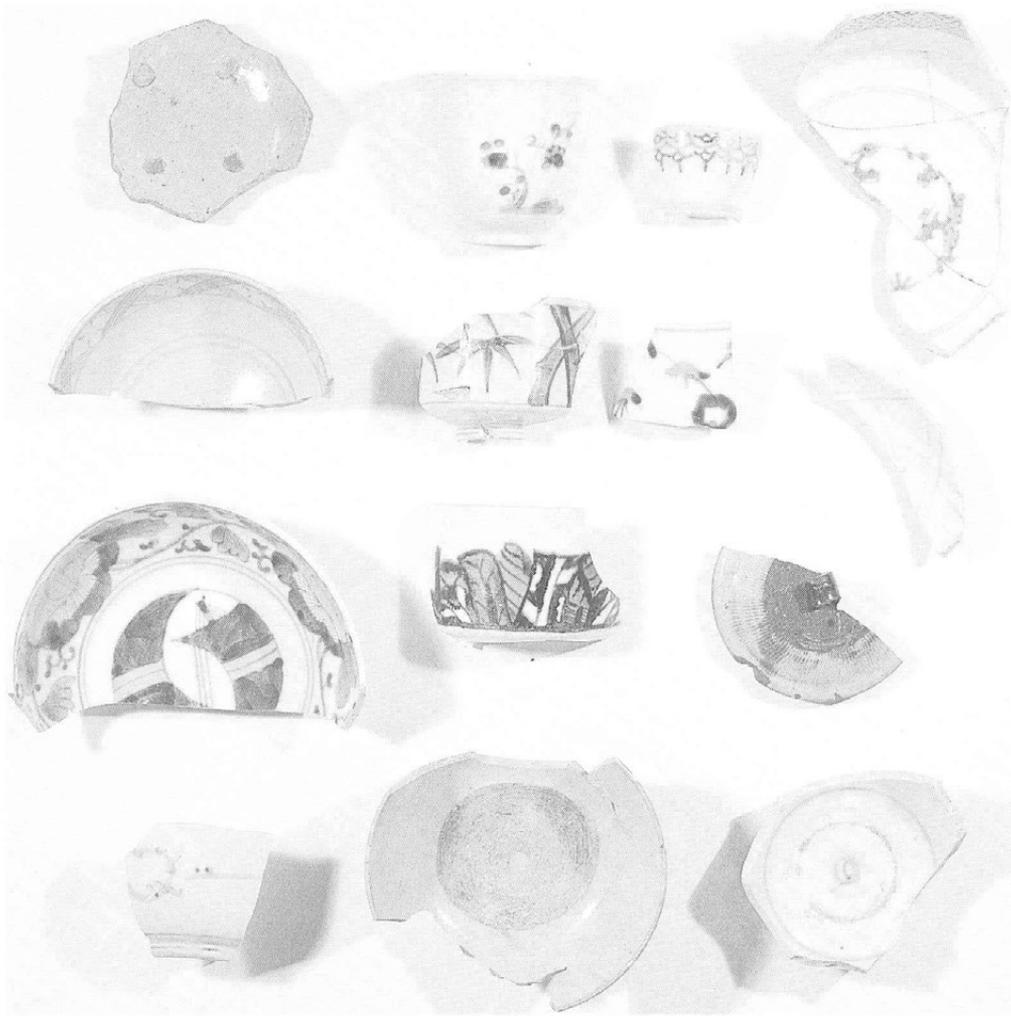


久玉IV-B

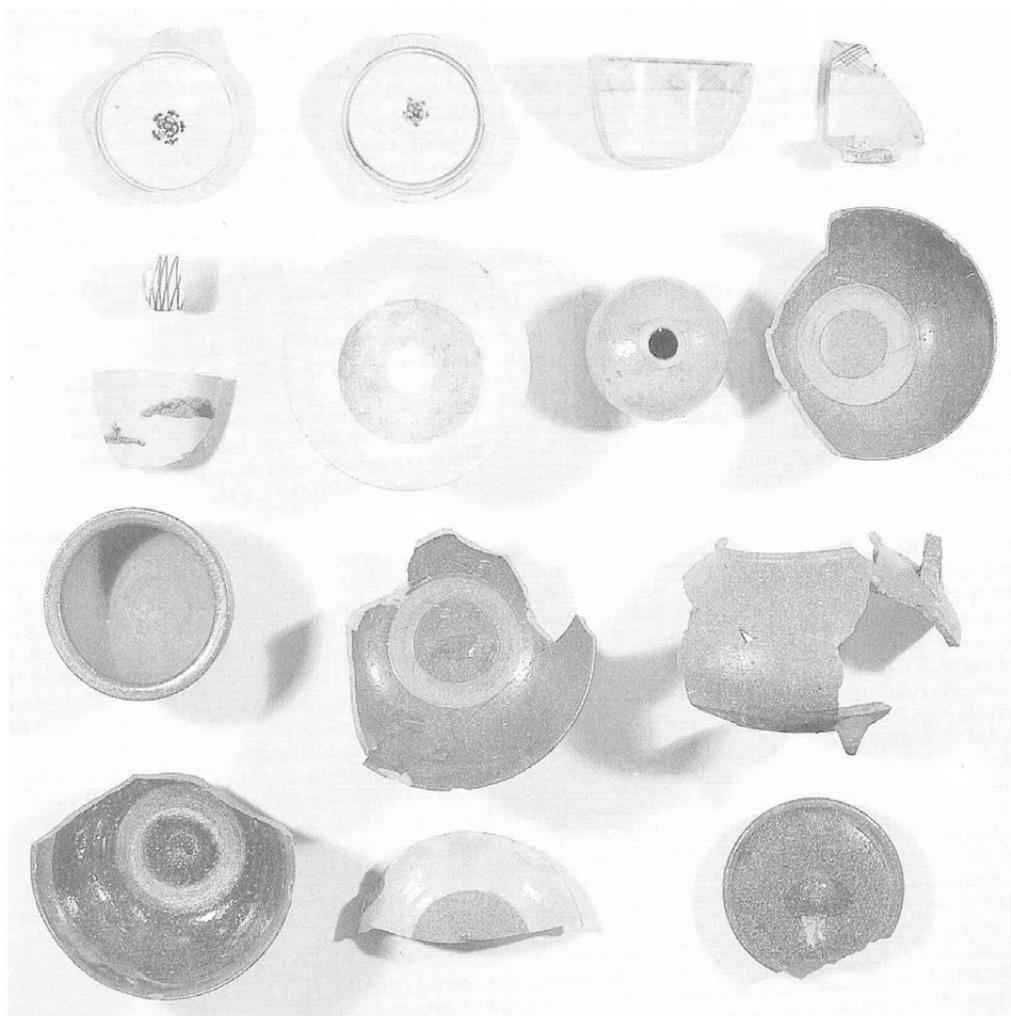


久玉IV-D

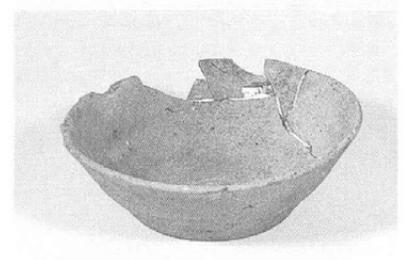
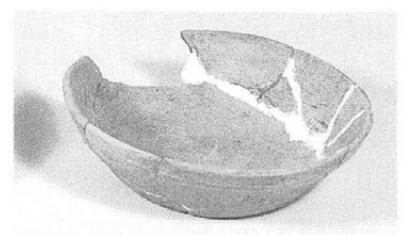




久玉Ⅳ-C



久玉Ⅳ-D



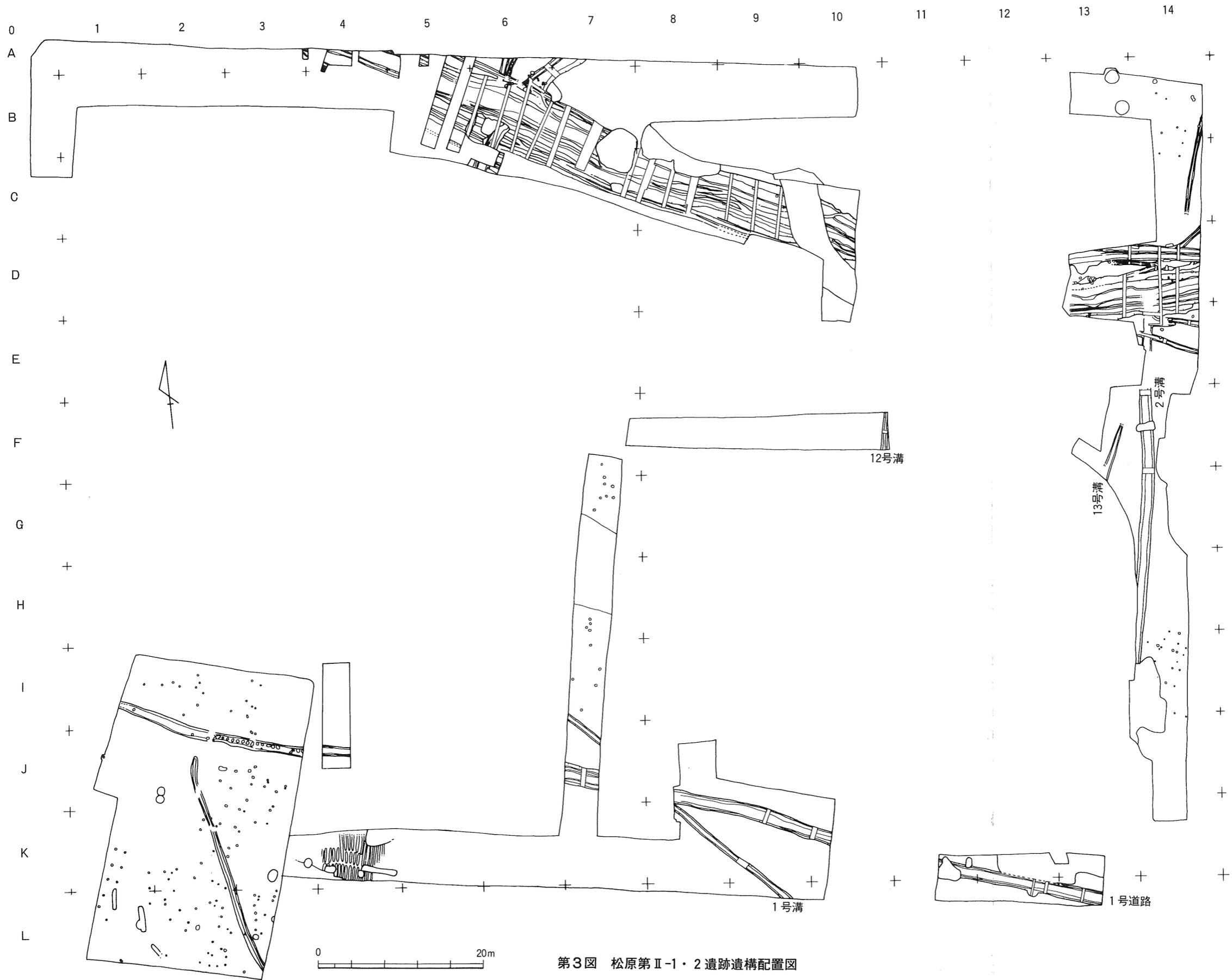
V 松原地区第Ⅱ—2遺跡

I. 調査に至る経緯

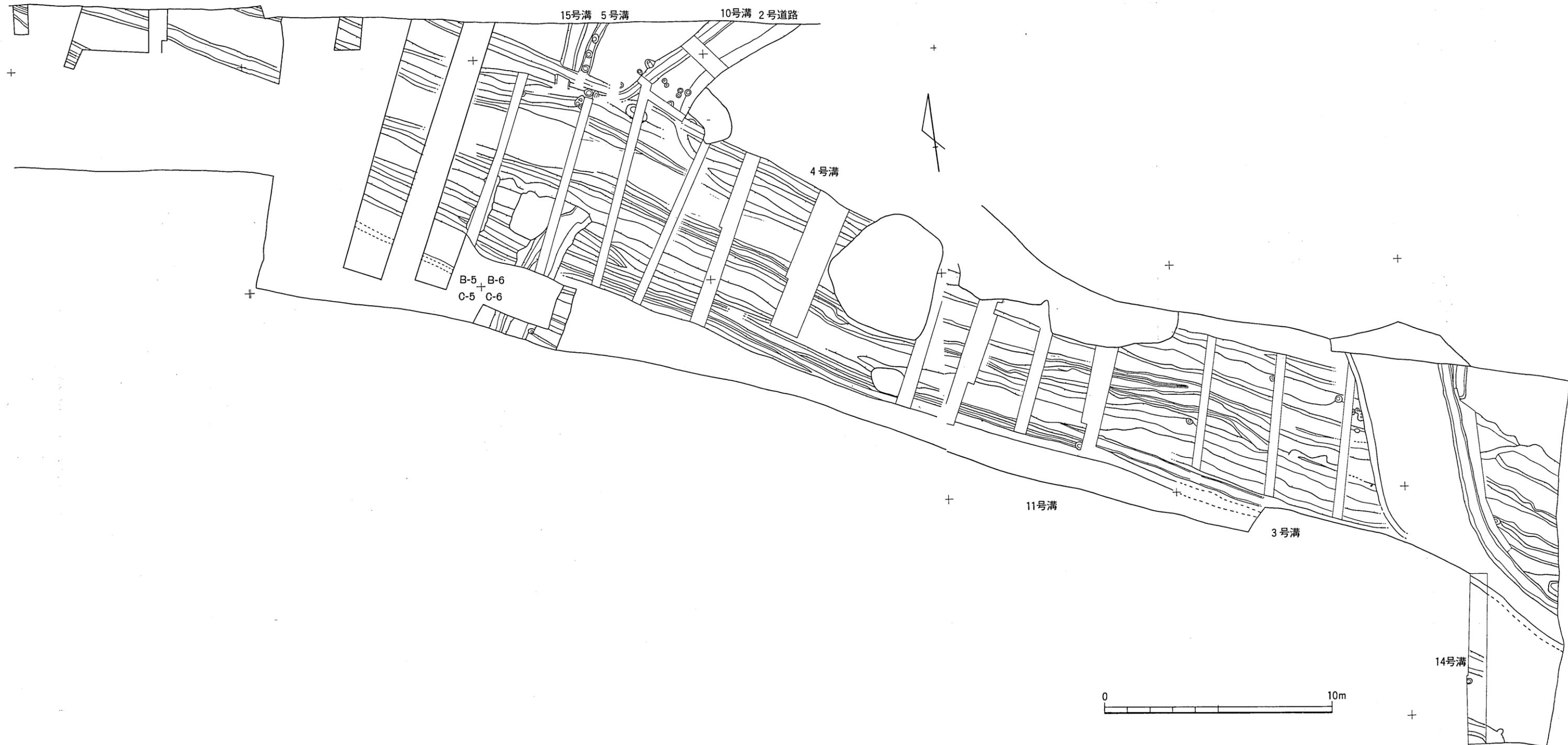
松原地区第Ⅱ遺跡は昭和60年度区画整理事業に伴い約2,000㎡の発掘調査を実施している。同遺跡は近隣公園予定地としてかなりの部分現況の状態で保存してきた経緯がある。平成3年4月都城市都市整備課より近隣公園造成事業の照会を受けた。事業計画は簡易造成の芝張りを主としたものである。しかし、境界外周は床掘りを行い柵及び立木を配するため、外周部分を中心に約3,000㎡を発掘調査することとした。調査期間は平成3年8月1日から同年11月20日までである。なお、今回調査した遺跡は、松原地区第Ⅱ-2遺跡とし、昭和60年度調査の松原地区第Ⅱ遺跡を松原地区第Ⅱ-1遺跡と改称する。



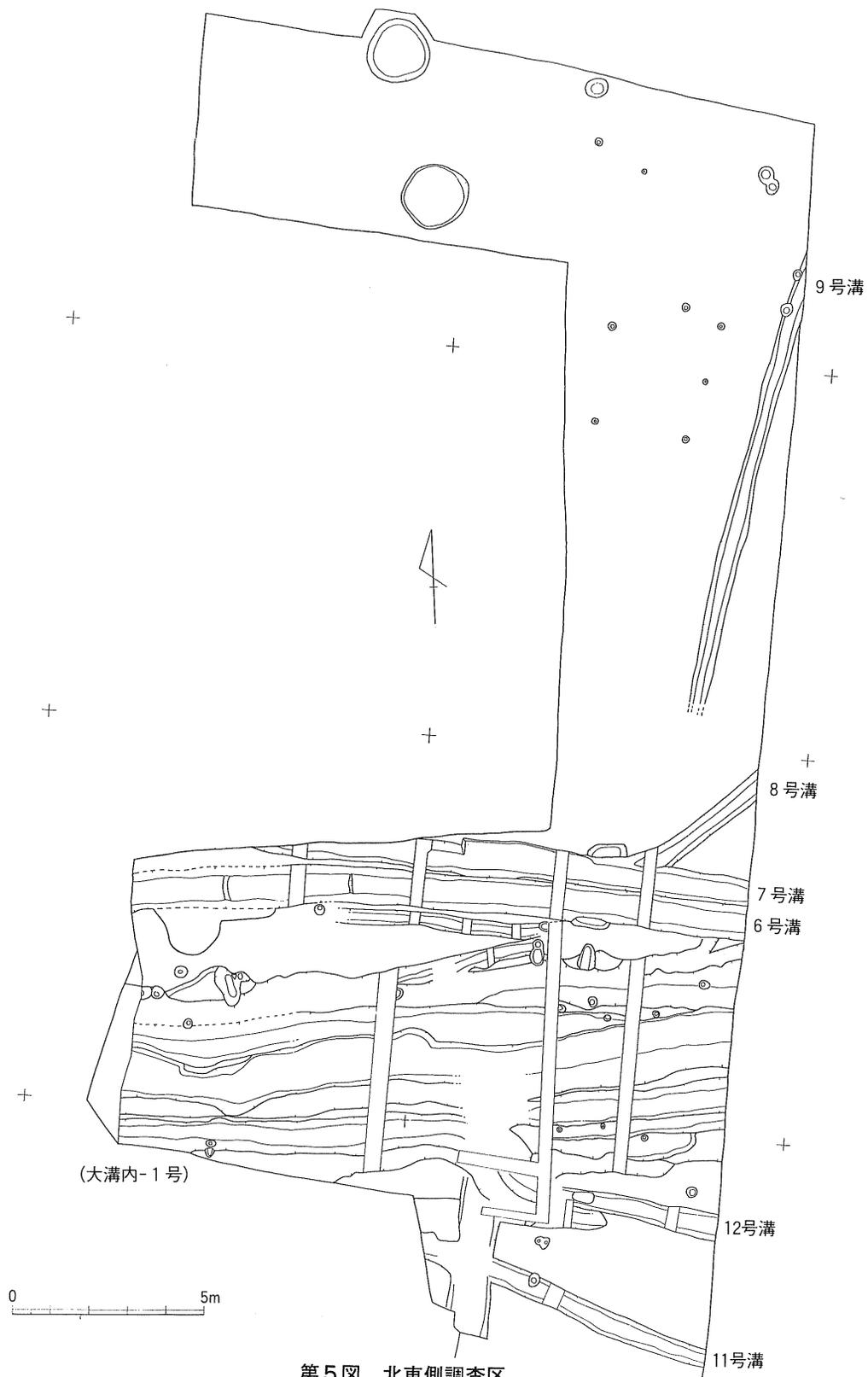
第1図 松原遺跡調査区域図



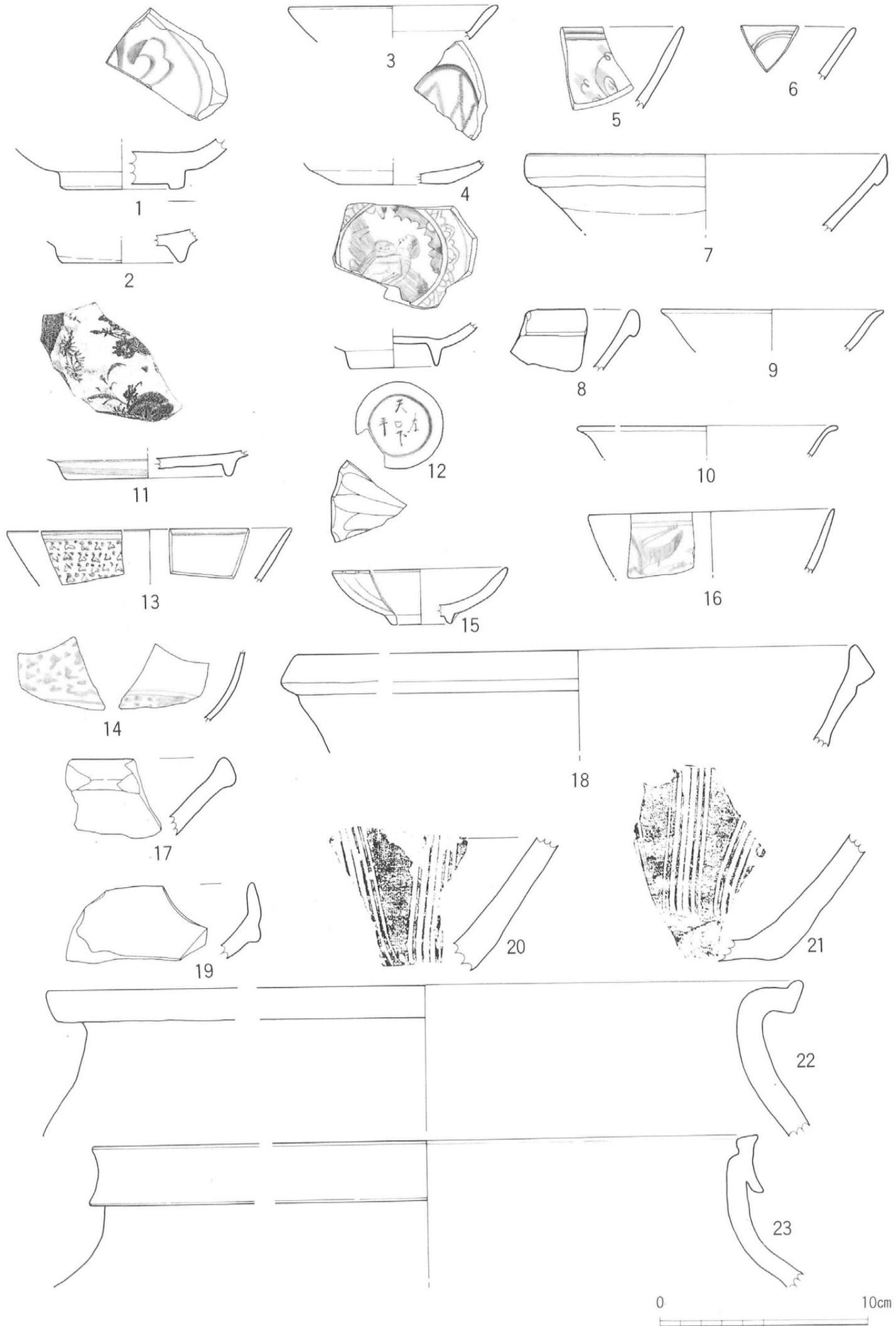
第3図 松原第Ⅱ-1・2遺跡遺構配置図



第4図 中央北側調査区



第5図 北東側調査区



第6図 松原第Ⅱ-2遺跡出土遺物実測図

調査方法は公共座標のN・S線に一致したメッシュにグリッドを区割し、単位グリッドを10×10mとした。また、各グリッドは南北方向を北からアルファベット、東西方向を西から算用数字を用いて表記した。

(2)遺構

道路状遺構 1号道路状遺構はL・13区で確認し、J・4区まで略西方向にほぼ直線的に走行する。溝幅は上場5.5m、下場2.5m、深さ0.8mを測る。溝中央に最大幅1.5mの硬化面2層を有し、両側は硬化していないため側溝様の落込みを呈している。また、この1号道路状遺構は松原地区第Ⅱ-1の2号溝に連続するものである。2号道路状遺構はA・7区で調査区域に登場し略南方向C・6区へ走行する。大溝との前後関係は不明である。

溝状遺構 全体で、15条の溝状遺構を検出した。溝は埋土が灰黒色土と黒褐色土のものに分けられ、ピットを伴うものもある。

畝状遺構 K・4区で畝列3、畝数10を検出、畝は灰黒色土を呈する。

(3)遺物

遺物番号	種別	器種	グリッド(遺構)	法量(cm)			特徴	備考
				口径	底径	器高		
1	青磁	碗	D-13 (大溝内北側溝)	—	6.0	—	㊸画花文	12-13C
2	青磁	碗	(大溝)	—	5.8	—		
3	青磁	皿	K-6	10	—	—		12-13C
4	青磁	小皿	C-8 (大溝)	—	5.3	—	見込みへラ描き 底部無釉	
5	青磁	碗	B-6 (大溝内1号溝)	—	—	—	㊸画花文	12-13C
6	青磁	碗	A-5 (大溝内北側溝)	—	—	—	㊸画花文	
7	白磁	碗	I-4 (Pit)	17.8	—	—	口縁玉縁	12-13C
8	白磁	碗	J-5 (西側トレンチ)	—	—	—	口縁玉縁	12-13C
9	白磁	皿	K-7	10.8	—	—	口縁一端反り	16C
10	白磁	皿	B-6 (大溝)	12.5	—	—	口縁一端反り	
11	青花	皿	D-14 (6号溝)	—	9.0	—	㊸植物文	景德鎮 16C代
12	染付	碗	B-6 (4号溝と5号溝の切り合い)	—	4.2	—	饅頭心型碗 ㊸仙人 ㊸高台内天下太平	16C後半
13	染付	碗	S-16 (4号溝)	13.5	—	—	蓮子型碗 ㊸花散文	15C末~16C中
14	染付	碗	B-6 (大溝)	—	—	—	㊸花散文	
15	青磁	小皿	B-5	8.4	2.8	2.7	口縁輪花	16C代
16	染付	碗	(大溝)	11.8	—	—		
17	東播系	こね鉢	B-6 (大溝)	—	—	—		13C
18	東播系	こね鉢	J-8	26.8	—	—	口縁肥厚面上部施釉(自然釉)	
19	備前	播鉢	B-6 (大溝)	—	—	—		
20	備前	播鉢	B-5 (大溝北側)	—	—	—		
21	備前	播鉢	D-13 (大溝)	—	—	—		
22	常滑	甕	D-14 (大溝)	36.4	—	—		12-13C
23	常滑	甕	B-6 (5号溝)	32.0	—	—	自然釉(灰釉)付着	14-15C前

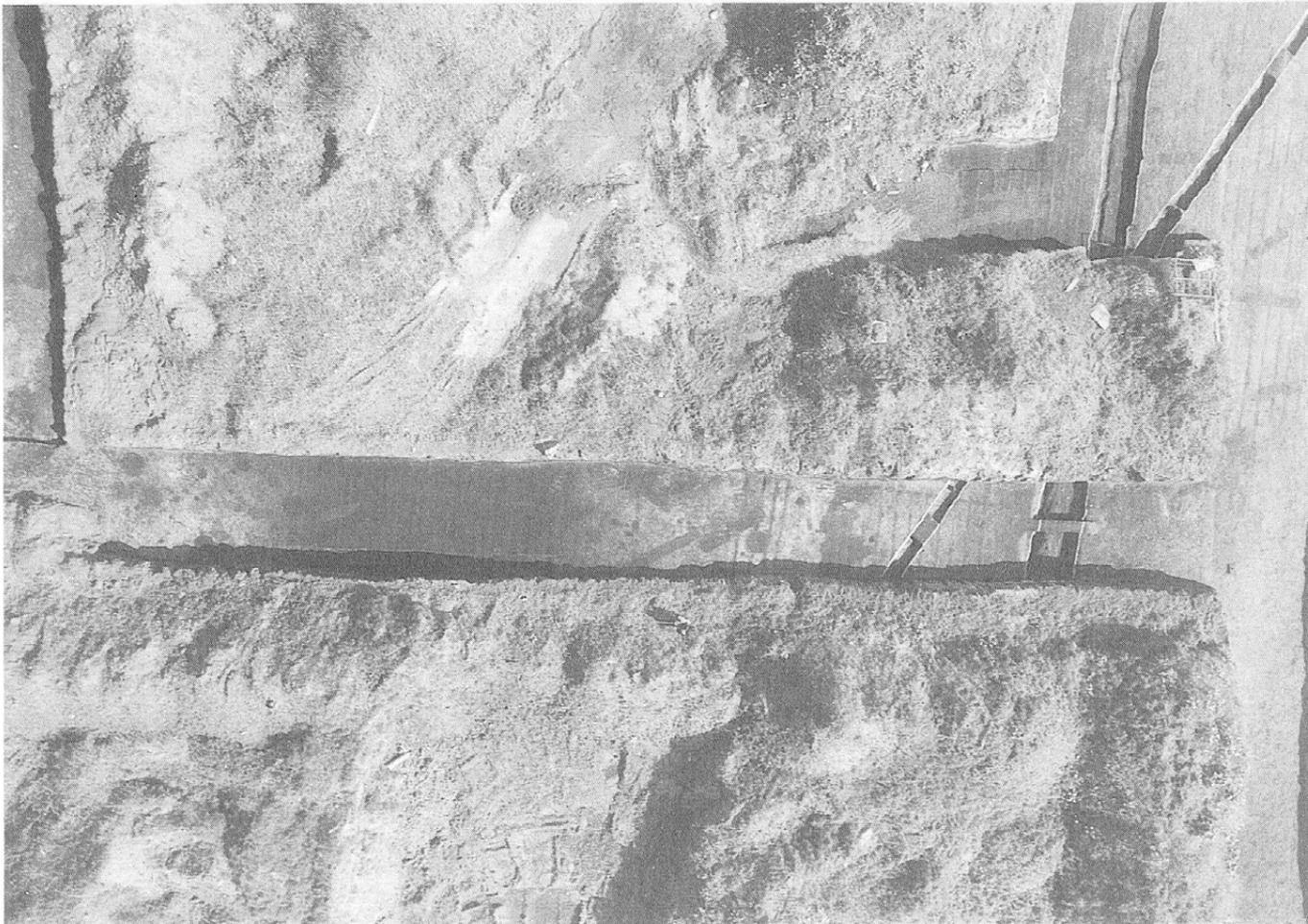
圖 版



調査区全景



南東側調査区



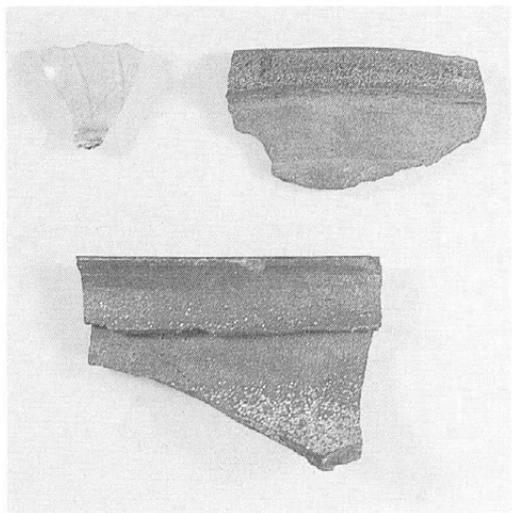
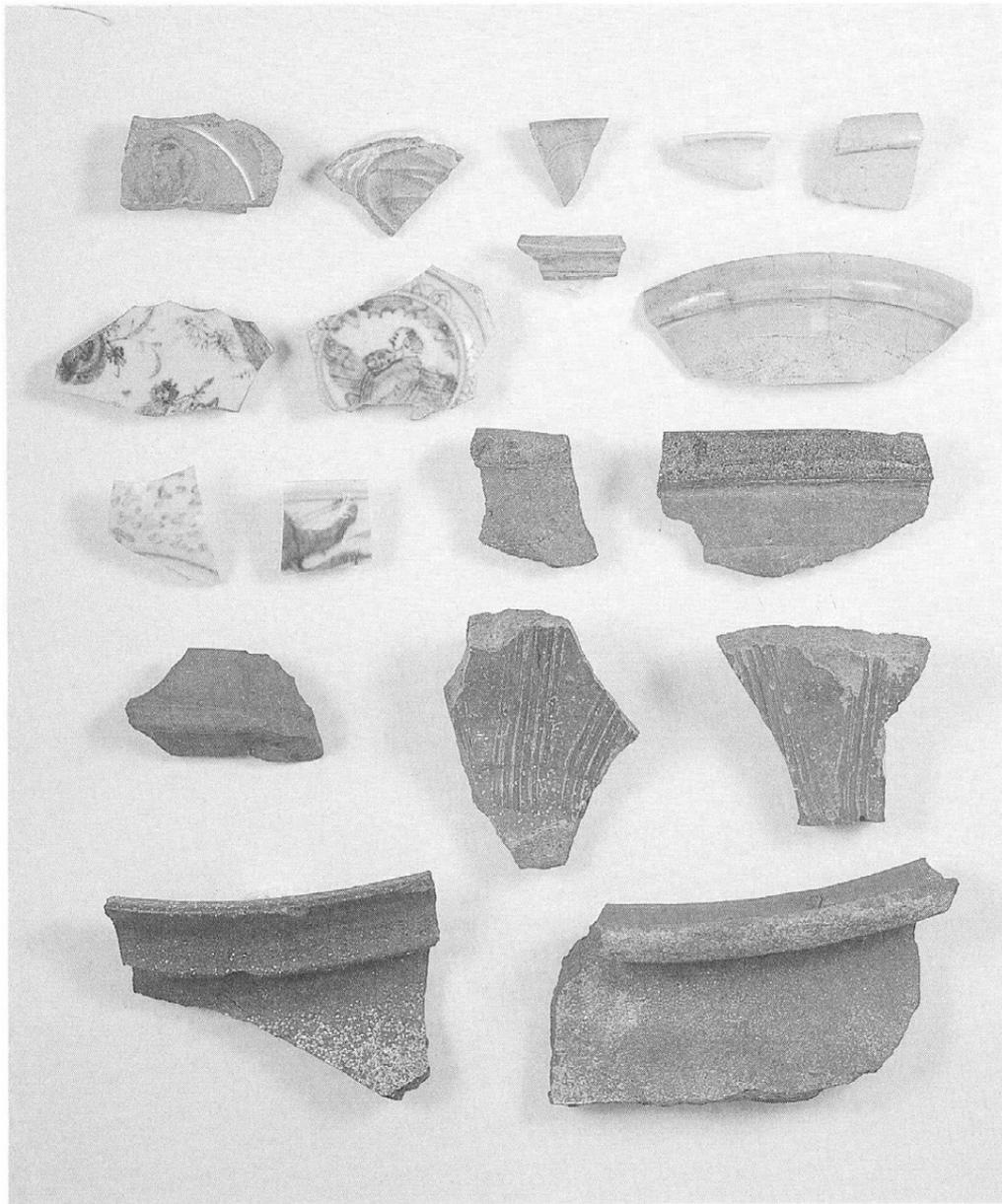
中央南側調査区



北東側調査区



中央北側調査区



VI ^{よこ}横 ^お尾 ^{ばる}原 遺跡

よこおぼる
横尾原遺跡

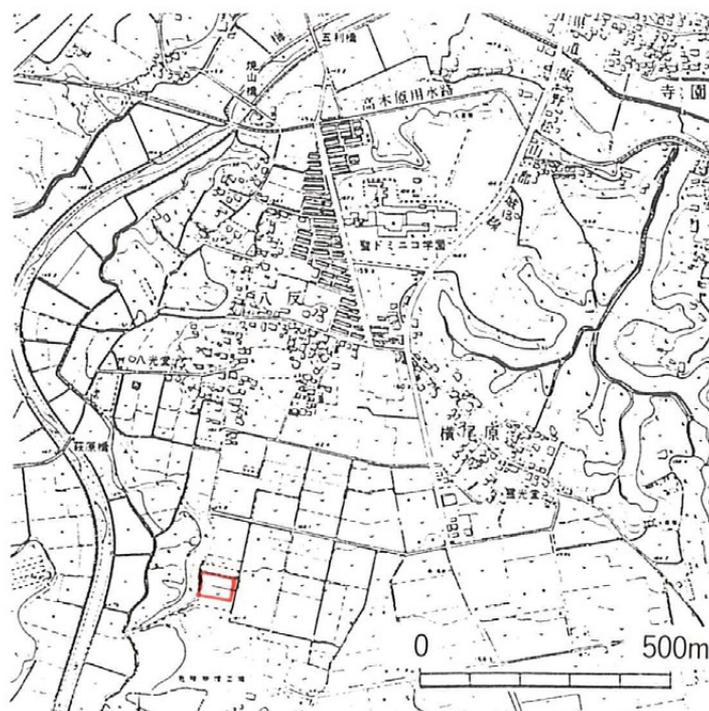
1. 所在地 宮崎県都城市大岩田町^{おおいわだ}5998-2
2. 調査原因 危険物埋め立て地造成
4. 調査期間 平成3年9月21日～平成3年10月23日
5. 調査面積 800m²
6. 調査概要

横尾原遺跡は、都城盆地の南部、通称横尾原のシラス台地の南端にあたり、その西側を大淀川の支流である梅北川が北流している。当該地区の現況は畑地であり、北から南へ階段状につくられている。調査の発端は、当該地のシラス採りを行っていた土木業者が、平成3年9月19日に火葬骨の納められた蔵骨器を2個を発見したことからである。この報告を受けた都城市教育委員会が現場に赴き、さらに、周辺から、墳墓が発見される恐れがあったので、一帯の発掘調査に着手した。なお、蔵骨器はいずれも須恵器製であり（第3図）、奈良時代のものと考えられる。

遺跡の地層は、最上層の耕作土を剥ぐと、灰白色の軽石層が、部分的に数cmの厚さで堆積していた。その下の黒色粘質シルト層（Ⅲ層）は、平安時代の土師器を包含しており、さらにその下の黄色軽石を含む黒褐色粘質シルト層（Ⅳ層）から縄文時代の遺物が見つかった。それ以下は霧島一御池降下軽石層（Ⅴ層）が約50cmの厚さで堆積している。

発掘調査範囲の西側は、Ⅱ・Ⅲ層の大半が削平されていたが、Ⅳ層の残存状況は良好であり、縄文時代晩期前半の遺物が大量に出土している。遺構は、奈良・平安時代のピットが2基、粘土の集積したかまど状遺構が3基見つかり、縄文時代晩期前半の土坑が4基と竪穴住居跡が1基見つかった。竪穴住居跡は2.8m×2.4mの隅丸方形を呈し、比較的小規模である（第4図）。住居内堆積土中から、炭化材やいわゆる松添式土器の深鉢形土器片と組織痕土器片（第2図）が出土した。

一方、期待された奈良時代の墳墓は発見できなかった。なお、シラス採りの際に見つかった蔵骨器2個に納められていた火葬骨については、鹿児島大学歯学部の鑑定を受けた。

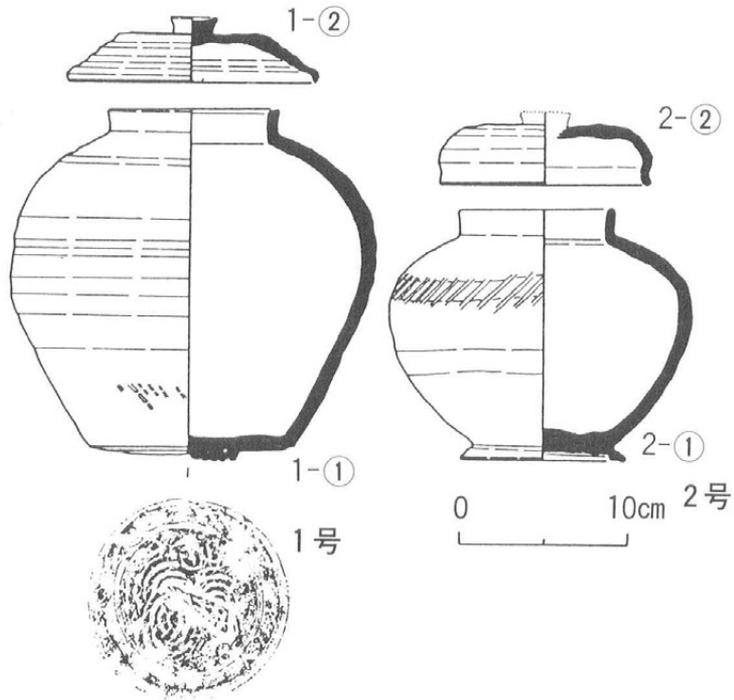


▲第1図 横尾原遺跡位置図

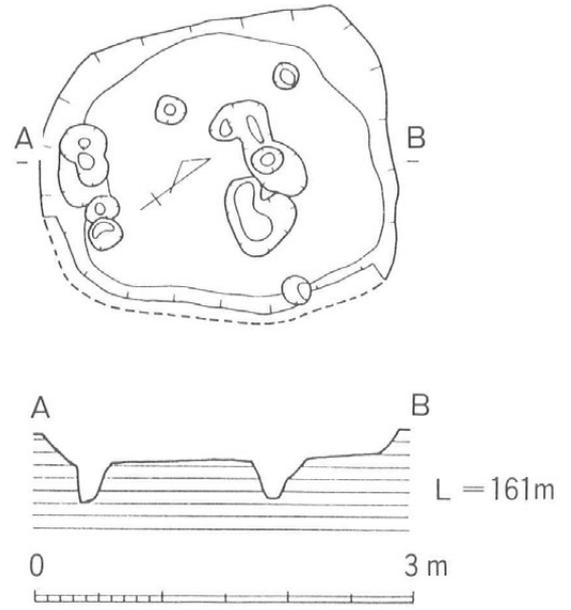


▲第2図 竪穴住居跡内出土土器





▲第3図 蔵骨器実測図



▲第4図 竪穴住居跡実測図
(縄文時代晩期前半)



▲土器出土状況 (上層が平安時代、下層が縄文時代)



▲縄文時代晩期の遺構群



▲竪穴住居跡 (縄文時代晩期前半)

7. 蔵骨器について（第3図）

火葬骨のぎっしり詰まった須恵器製の壺2個体（1号・2号）が見つかったが、発見した土木業者の話によるとパワーショベルで崖を削っていたときにバケットに同時に2点が、収まっていたとのことで、両者は近接して埋納されていたものと推察される。また、発見直後に知らせを受けた都城市教育委員会の職員が現場に立ち会っているが、その時の所見では、付近に石組等の施設は見あたらず、御池降下軽石層の上に堆積する黒色腐植土層中から出土していたようで、黒色腐植土層に掘り込まれた土坑に納められていたものと考えられる。

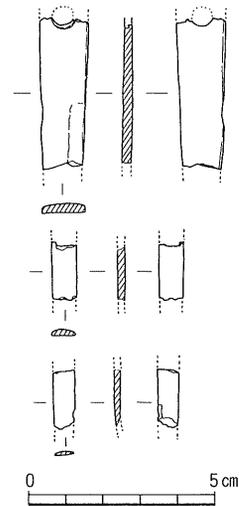
（（横尾原1号））1-①は、須恵器短頸壺である。短く直立する口縁部から屈曲して、丸くふくらむ胴部へといたる。胴部外面はタタキ後、回転ナデ調整が行われており、胴下半に格子目のタタキ痕を残す。底部には同心円タタキ痕が見られるが、その周囲には回転ナデが施され、底面は不安定な凸面状をなす。なお、底面には同心円タタキのある須恵器片が熔着している。色調は暗緑灰色を呈し、口縁部から胴部上半にかけては自然釉のため光沢がある。なお、内部からは火葬骨とともに、偏平に加工された骨製品4片が見つかった（第5図）。加熱を受けており、いずれも砕けているが、そのうちの一点に、径5mm程度の穿孔が見られる。筈であろう。1-②は、須恵器蓋である。天井部は、回転ヘラケズリにより平坦面がつくられ、中央に頂部のくぼんだつまみが張り付けられている。口縁部は回転ナデが施され、先端が屈曲し、内側にかえりはない。天井部がにぶい橙色を呈し、その他は暗オリーブ色を呈している。これは、本来、坏の蓋として製作されたものであるが、1-①の壺の蓋に転用されたものである。

（（横尾原2号））2-①は、高台付き須恵器短頸壺である。口縁部は直立し、胴部は丸い。底部内部は若干ふくらみ、底面は平坦に仕上げられている。高台は貼り付けられ、外方へ傾斜する。壘付部は平坦である。器面は、タタキ後、回転ナデが施されており、肩部付近に平行タタキ痕を残す。色調は青灰色を呈し、肩部と胴部には自然釉がかかる。口縁部から肩部にかけての直径11.5cmの範囲は釉が見られないので、焼成の際は蓋をかぶせて窯入れされたものと思われる。2-②は、須恵器蓋である。半分を欠損している。天井部は回転ヘラケズリが施され、わずかにくぼむ。中央部につまみが貼り付けられていたものと思われるが、失われている。口縁部は先端で弱く外反し、色調は緑灰色を呈する。

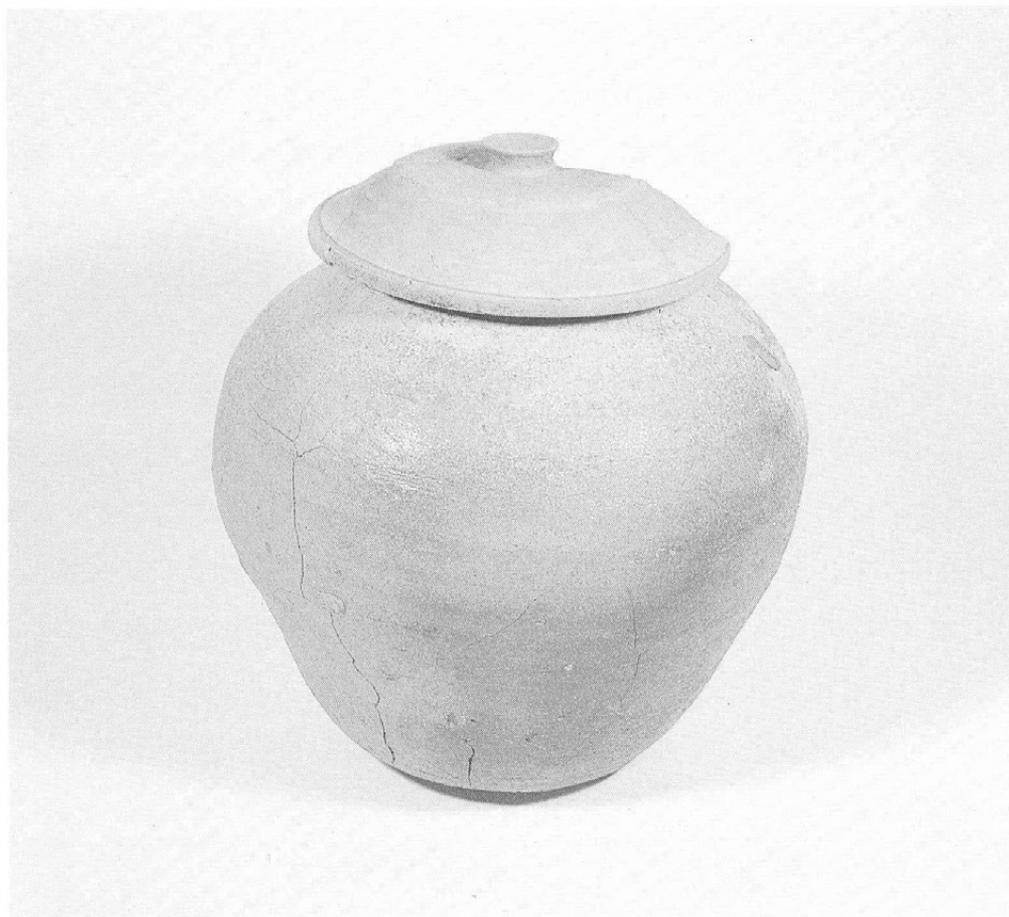
横尾原1号は、肩部の張りは見られず、高台をもたない。器高と胴部最大径はほぼ同じである。底面の同心円タタキ痕は、その技法的系譜に関して注目される。いわゆる「寄集形」であり、セットとなる蓋は坏蓋の転用品であるが、その天井部は高く、平坦に削られている。小田富士雄氏編年の第Ⅶ様式（小田富士雄 1977 「豊前地方における須恵器」『天観寺山窯跡群』）にあたり、8世紀中葉に位置づけられている。

横尾原2号は、高台が「ハ」の字形に傾斜し、器高より胴部最大径が大きい。

1・2号ともに奈良時代後半に位置づけられよう。



第5図 骨製品実測図
※3点のみ図化した。



▲1号蔵骨器



▲2号蔵骨器

横尾原遺跡出土の蔵骨器

附 篇

都城市横尾原遺跡出土の火葬人骨

峰 和治・小片丘彦・竹中正巳

(鹿児島大学歯学部口腔解剖学第2講座)

都城市横尾原遺跡出土の火葬人骨

峰 和治・小片丘彦・竹中正巳

(鹿児島大学歯学部口腔解剖学第2講座)

1991年9月、都城市大岩田町横尾原の土砂採取現場から火葬人骨を納めた蔵骨器2点(1号および2号)が出土した。いずれも奈良時代後半(8世紀後半)に位置づけられる蓋付きの須恵器短頸壺で、別項で述べられている通り、極めて近接した位置に埋納されていたものと考えられることから、被葬者間の関係が注目された。火葬骨は一般に変形と細片化をきたしているため、人類学的研究の対象としては関心が薄かったが、太安萬侶墓出土焼骨の精査(池田, 1981)や多数の火葬人骨を出土する中世墓群の調査(中橋・永井, 1985;中橋, 1990)以降、火葬に関する情報を引き出せる資料として、その価値が見直されている。この機会に横尾原資料から得られた所見の概要を報告し、南九州における火葬風習の一端を示すデータとして追加したい。

(なお、当初は蔵骨器ごとに人骨の部位同定を進めていたが、1号および2号蔵骨器から別々に検出された下顎骨の小破片1組が接合できたことから、人骨混在の可能性を考慮しながら改めて整理作業を行った。その結果、両蔵骨器には基本的に別個体の焼骨が納められているが、一部の破片が相互に混入しているものと考えられた。納骨時からの混在であれば、また大きな意味があるが、蔵骨器出土後に何らかの経緯で混ざった可能性もあり、本報告ではその解釈を一応保留しておく。)

観察結果

両蔵骨器から検出された火葬人骨の同定部位を表1に示す。炭粉と2mm目の篩を通った微細破片を除いて焼骨の重量を計ったところ、1号では約1,110g、2号では約630gあり、それぞれ蔵骨器の径に対応した量といえる。

1号蔵骨器からは表1の通り、ほぼ全身にわたる部位が確認された。性別は外後頭隆起の強い突出(Brocaの4度)や体肢骨の太さ、緻密質の厚さなどから、男性とみなされる。頭蓋三主縫合の一部を含む破片が5点あり、いずれも内板の閉鎖をほぼ完了し、外板でも一部に閉鎖が見られる。また本個体のものと考えられる下顎骨(破片は両蔵骨器から検出されている)からは、切歯~小臼歯の植立と第1大臼歯の残根、第2・第3大臼歯部の歯槽閉鎖といった歯列の状態がうかがえる。以上の所見から年齢は熟年~老年と推測される。歯は上顎小臼歯と上顎大臼歯の破片2点が遺存しているが、歯冠破損のため、咬耗度や齶蝕の有無を見ることはできない。体肢骨のうち、ある程度の接合・復元ができたのは右上腕骨体13cm、左上腕骨体20cm、左大腿骨体上部13cmの3カ所である。このうち左上腕骨推定中央位での最大径は23mm、最小径は17mmとさほど太くはないが、断面示数73.9でやや扁平性を示し、三角筋粗面もよく発達して

いる。また、左大腿骨体上横径は31mm。同部の緻密質は最も厚い部位で9mmあり、非常に頑丈である。焼骨の色調は黒色、茶色、灰色、白色などと変異に富むが、全体に黒味を帯びた不完全焼骨とみなせる破片が多い。体の位置による焼け方の偏りは特に認められず、後頭骨、左右側頭骨、前頭骨の破片はいずれも黒色～青灰色を呈する。また、ひとつの破片でも色が斑らで、火を強く受けた部分と火から離れた部分とでは焼成度に著しい差があることを示す例も少なからず見られる。

2号蔵骨器から検出された焼骨の量は1号の約2/3で、同定できた部位は主に頭蓋と下肢骨である。性別は、判定に有効な部位がほとんど確認できず、不詳である。頭蓋縫合は1号と同様に内板で閉鎖し、外板でも閉鎖が始まっており、左下顎体片の歯槽（左小白歯～大白歯部）がすべて閉鎖していることから、熟年～老年と判定した。歯は5本遺存しているが、いずれも歯根片で歯冠の状態は不明である。骨の色調は、1号に比べて全体に白味を帯びており、白色を呈する完全焼骨の割合が高い。完全焼骨は亀裂を生じて細片化が進み、歪みの度合いも大きく、部位同定の妨げともなっている。その一方、2号蔵骨器には骨本来の象牙色を残した「生焼け」状態の骨片も多く含まれている。その傾向は特に椎骨片に強いが、これは火葬時の火の回り具合を表しているものと推測される。

おわりに

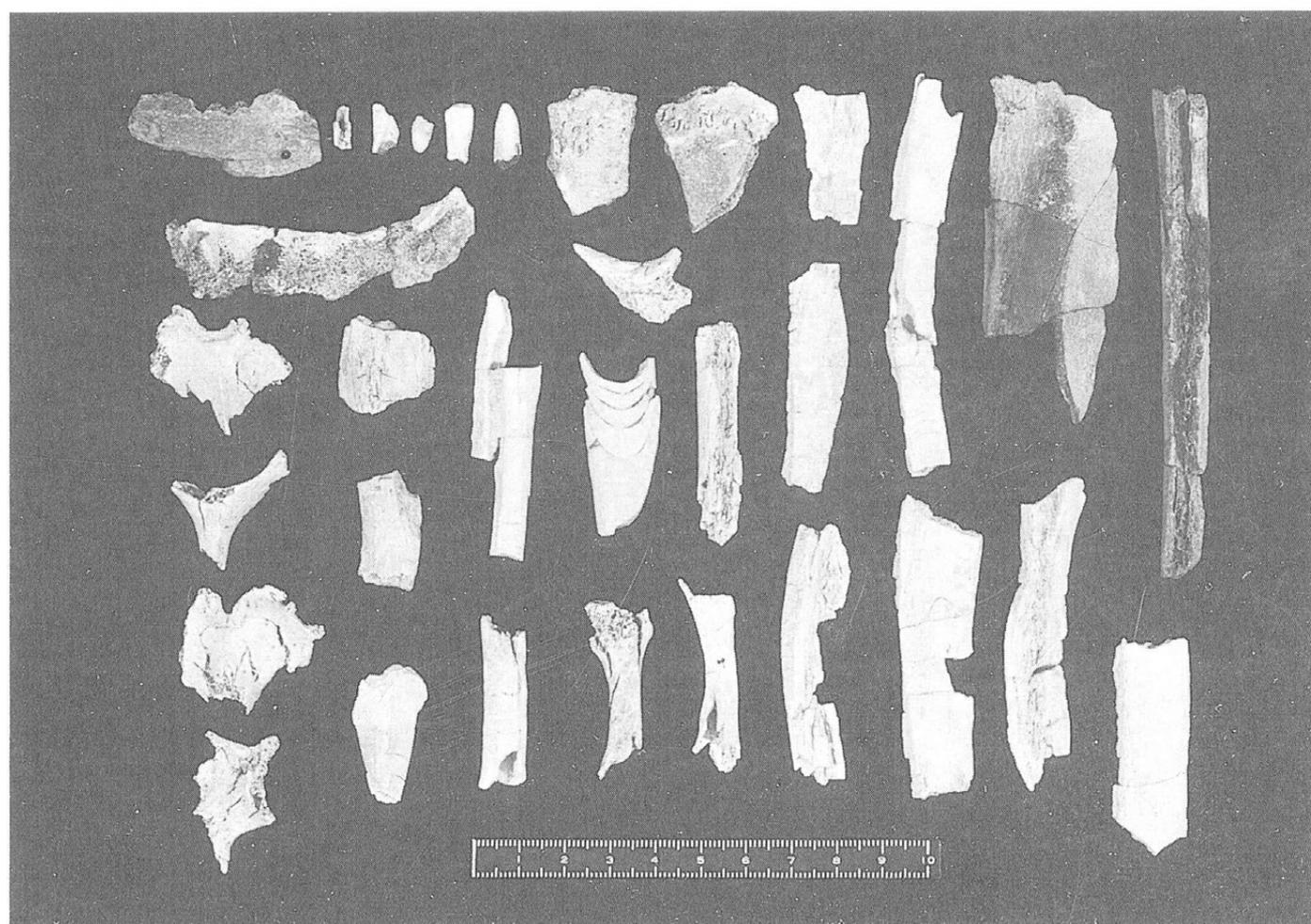
横尾原1号の例は、遺存した骨量も多く、ほぼ全身にわたる骨種が同定されたが、それでも明らかに欠損する部位があり、焼骨のすべてが納められていたとは言い難い。さらに2号の場合は、生前の体格差を考慮したとしても、不足部分が多過ぎる。表2に鹿児島県下から出土した蔵骨器内火葬骨の報告例を示したが、検出される焼骨の量には蔵骨器ごとに大きな差がある。これが火葬後の拾骨が丹念に行われたかどうかということの意味するのか、あるいは分骨の結果なのか、今後例数の増加を待って検討しなければならない課題である。

文献

- 池田次郎，1981：出土火葬骨について。「太安萬侶墓」，奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第43冊，奈良県立橿原考古学研究所編。
- 松下孝幸，1984：鹿児島県大隅半島出土の火葬骨。鹿児島考古18。
- 中橋孝博，1990：1区中世墳墓出土の火葬人骨。「津古土取遺跡」，小郡市文化財調査報告書第59集，小郡市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文，1985：山口県吉母浜遺跡出土人骨。「吉母浜遺跡」，下関市教育委員会。
- 小片丘彦，1988：川内市御陵下町越ノ巣出土蔵骨器内の火葬骨。川内市歴史資料館年報 昭和62年度，川内市歴史資料館。



横尾原1号蔵骨器内火葬人骨の主要破片



横尾原2号蔵骨器内火葬人骨の主要破片

Ⅶ 黒^{くろ}土^{つち}遺跡

くろつち 黒土遺跡

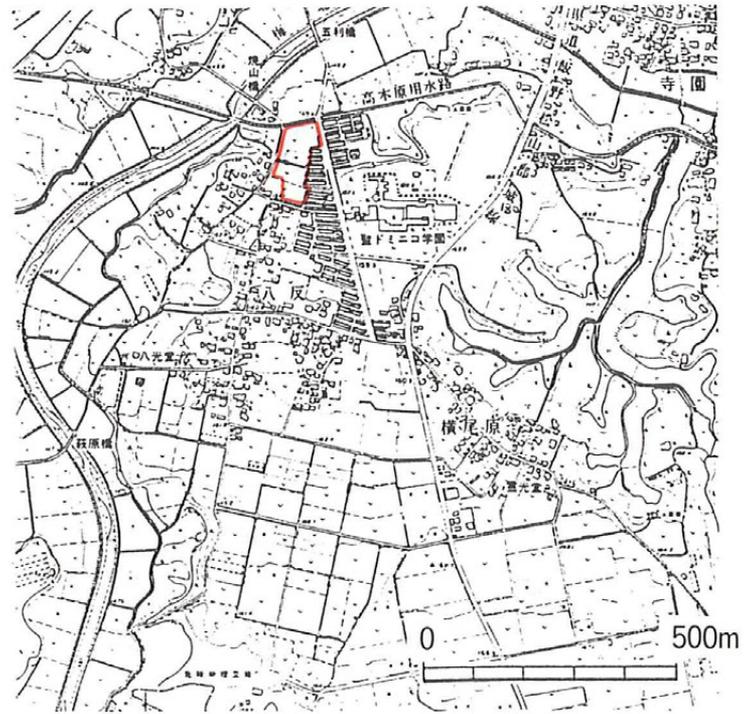
1. 所在地 宮崎県都城市大岩田町^{おおいわだ}5597-5
2. 調査原因 分譲住宅建設予定地の造成
3. 調査期間 平成4年2月10日～平成4年3月14日
4. 調査面積 1,618㎡（道路敷設部分）
5. 調査概要

黒土遺跡は、都城盆地の南部，通称横尾原のシラス台地が北へ穏やかに傾斜する面にあたり，その西側を大淀川の支流である梅北川が北流している。河川流域の現水田面（休耕地が多い）との比高差は約5mを測る。当該地区の現況は畑地であり，南から北へ階段状につくられている。

遺物包含層は，黒色土層（第Ⅳ層）と黒褐色土層（第Ⅴ層）であり，前者から古代・中世の遺物が，後者から縄文時代晩期から弥生時代の遺物が出土している。

遺物包含層が地表面から比較的深いために耕作による影響の少なかった南側調査区においては，縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半の遺物が多量に出土している。土器には主として，刻目突帯をもつ深鉢形や丹塗りの壺形が見られる。特筆すべきは，同地区から出土した完形の石庖丁であり，すり切り技法による穿孔が施されている。

一方，北側の調査区においては，下層から弥生時代の前期と中期に位置付けられる土器が出土しており，上層から平安時代と中世の土器が見つまっている。遺構は，桜島起源の文明年間（15世紀後半）に噴出したとされる軽石層の堆積した中世の溝状遺構が2本検出され，弥生時代の前期ないし中期の遺物の出土する土坑と竪穴式住居跡が，それぞれ1基ずつ見つまっている。他に時期不明の道路状遺構3本が確認された。



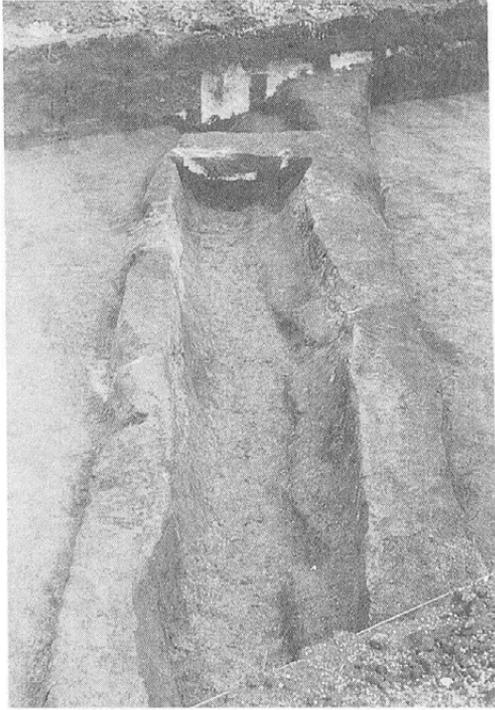
▲黒土遺跡 位置図



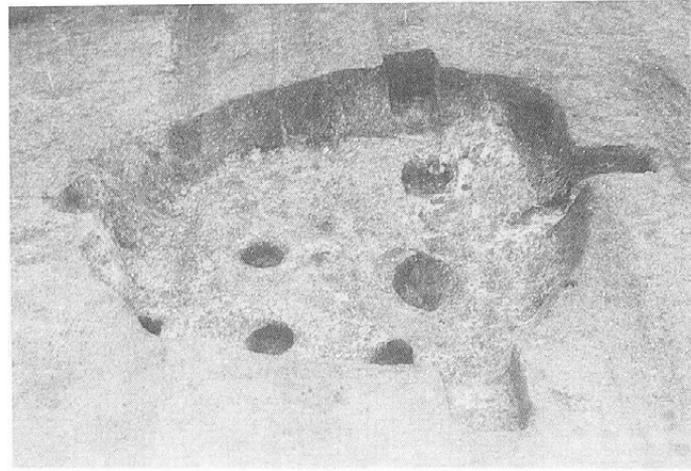
▲遺跡空中写真（北から）



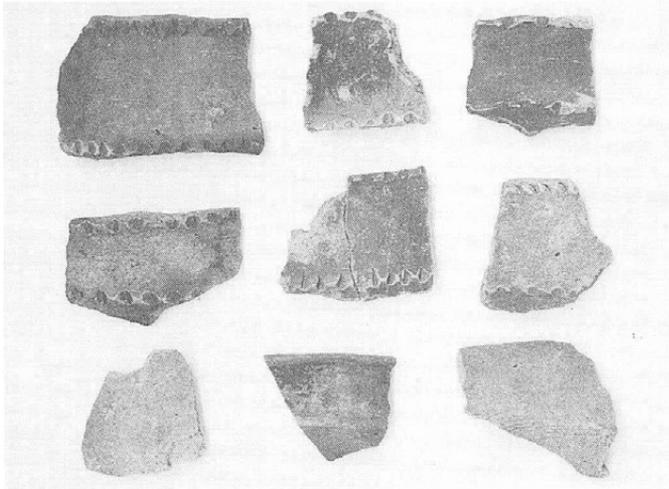
▲土器出土状況（Ⅴ層）



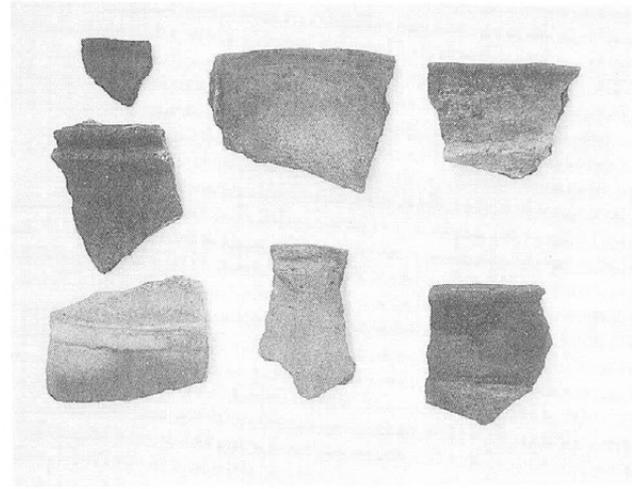
▲ 中世の溝状遺構（南から）



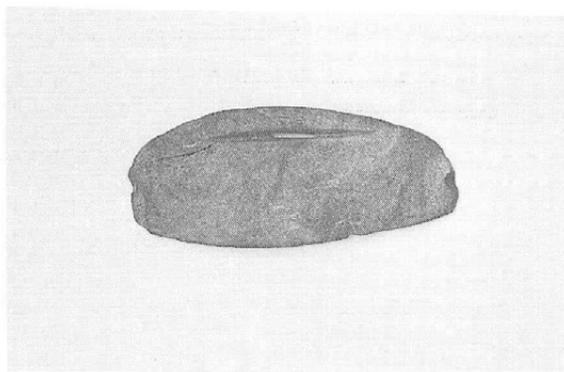
▲ 弥生時代の竪穴住居跡
（前期後半～中期？）



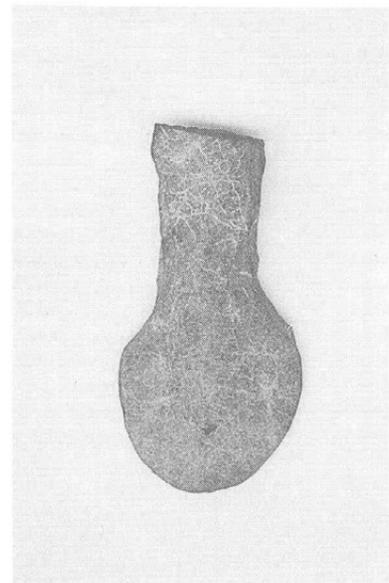
▲ 縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半の土器
※上2段は突帯文土器、下段は丹塗り壺と浅鉢



▲ 弥生時代前期後半の土器



▲ 有溝石庖丁



▲ 石製土掘具

VIII. 都城市内平成3年度発掘調査一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査員	時代	備考
5018	あからでん 油田	都城市大岩田町字油田	H3.3.25～4.3	栗畑 光博	縄文	確認
6013	にしはら 西原第2	都城市久保原町字栗原	H3.4.25～6.9	栗畑 光博	縄文	
5020	せとのうへ 瀬戸ノ上	都城市都島町字瀬戸ノ上	H3.4.22～7.22	横山 哲英 重永 卓爾	中・近世	
4006	くさぎ 久玉(第4次)	都城市郡元町字久玉	H3.6.18～7.31 H3.12.～H4.1	矢部喜多夫	中・近世	
	みやこのしろ 都之城跡 池之上・中尾・取添	都城市都島町・鷹尾町	H3.6.18～7.30	栗畑 光博	中・近世	確認
	たけやま こまがの 竹山・胡麻ヶ野	都城市美川町	H3.7.16～7.20 H3.8	横山 哲英 栗畑 光博	縄文	確認
4005	まつばら 松原地区第Ⅱ-2	都城市郡元町字松原	H3.8.1～11.20	矢部喜多夫	中・近世	
8047	かねいしじょう 金石城跡	都城市庄内町	H3.8.9～12.6	横山 哲英	縄文 中・近世	
6006	かじや 加治屋	都城市南横市町字加治屋	H3.8.3～8.5	栗畑 光博	弥生	確認
7033	よこおのぼる 横尾原	都城市大岩田町字横尾原	H3.9.21～10.23	栗畑 光博	縄文 奈良・平安	
	なかだ、ごろう 中大五郎第1・2	都城市丸谷町字中大五郎	H3.10.23～H4.2.2	長友 郁子 山田洋一郎	弥生・中世	
9010	なみきぎと 並木添	都城市高木町字並木添	H3.10.29～11.2	栗畑 光博	中世	確認
	くろ つち 黒土	都城市大岩田町黒土	H3.11.26～11.30	栗畑 光博	縄文・弥生 平安・中世	確認
	あまがはら 天神原	都城市早水町天神原	H3.12.9～12.12	栗畑 光博	中世	確認
1002	うへののぼり 上ノ園第2	都城市早鈴町字上ノ園	H3.12.10～12.13	横山 哲英	弥生・古墳	確認
	黒土	都城市大岩田町黒土	H4.2.10～3.14	栗畑 光博	縄文・弥生 平安・中世	

都城市文化財調査報告書 第16集

西原第2遺跡	築池地下式横穴墓1991-1号
久玉遺跡(第4次調査)	松原地区第Ⅱ-2遺跡
横尾原遺跡	黒土遺跡

平成4年3月

発行

宮崎県都城市教育委員会
宮崎県都城市姫城町6街区21号

印刷

(株)都城印刷